

【完結】トライアング ル・エラー

月島しいる

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「ねえ、私たちが付き合ってみない？」

幼少期から長い年月を過ごした三人。

いつまでも続くと思っていた関係は、ある時を境に呆気なく破綻した。

ヤンデレ、三角関係を主題にしたラブコメ風味の学園恋愛ものです。

目次

最終話	再生	116
11話	破綻	106
10話	エラー	93
09話	落葉	84
08話	拡散	75
07話	連鎖	66
06話	破壊	54
05話	衝突(2)	44
04話	衝突	37
03話	告白(3)	25
02話	告白(2)	12
01話	告白	1

01話 告白

「俺、彼女ができたんだ」

囁くように言ったのは、友人の東村拓海（ひがしむら たくみ）だった。

放課後の閑散とした教室。

警戒するように周囲を確認したあと、拓海は嬉しそうに言葉が続けた。

「中学の時、池澤って子いただろ。四回目のデートの帰り道で告ってみた」

池澤。たしか、学年の中でも綺麗どころだった。

その報告は正直なところ予想外で、どういう反応をすればいいのかわからなかった。

ただ曖昧な笑みを浮かべることしかできなかった。

拓海は整った顔をしているが、これまで浮いた話とは無縁だった。

「正直、驚いた」

思ったことをそのまま口にする、拓海は悪戯っぽく笑った。

「俺はそんなにモテそうじゃないか？」

「いや、異性に興味なさそうだったから」

中学の時は部活にしか興味をみせない奴だった。誰もが彼のストイックさに舌を巻

いていた。

「そうか？ 隠れてマッチングアプリとかやってたけど」

要領のいい奴だ、と思わず苦笑する。

陸上部で随一の結果を出していた拓海は、大人たちに受けがよかった。

拓海は俺と違って何事も卒なくこなしてみせる奴だった。

「お前も使ってみるか？ 月額のアプリなら詐欺師も少ないし」

「いや、俺はいいよ」

首を横に振ると、拓海は意味深な笑みを見せた。

「すでに両手に花だもんな」

言葉に詰まった時、廊下から声が聞こえた。

「瞬矢！ 待たせてごめん！」

振り返ると、戸口に二人の女子が立っていた。

一人は清潔感のあるポニーテールが目立つ葛城結衣（かつらぎ ゆい）。

もう一人はやや身長が高く、少し目つきの悪い長宮葵（ながみや あおい）。

二人とも、俺の幼馴染だった。

「いやー、教室でちよつと話し込んでんじやあって」

結衣が顔の前で両手を合わせて、とたとたと走り寄ってくる。

俺は用意していた鞆を手にとつて席を立つた。

「拓海、さっきの話は明日詳しく聞かせてくれ」

「ああ、おつかれ」

拓海に小さく手を振つて、結衣と並んで教室を出る。

廊下で待つていた葵が穏やかに微笑んだ。

「待った？」

「いや」

「そっか」

短いやり取りを終えて、そのまま昇降口に向かう。

俺と結衣と葵。

家が近く、幼少期の公園デビューを起点にこれ十数年の付き合いになる。

男1。女2。

正直、居心地が悪いときもある。

今だつて、結衣と葵が並んで歩くのを俺が後ろについて歩く形になっていた。

元来、俺はあまり口数が多いほうではない。

二人の会話をぼんやりと聞きながら、校庭を出る。

茜色に染まる空に、うろこ雲が浮かんでいた。

秋の訪れを示すように、冷たい風が頬を撫でる。

「だからさあ、十五センチ差くらいが一番いいんだって」

数歩前では、結衣が楽しそうに声をあげていた。

「瞬矢もそう思わない？」

不意に話題を振られて、俺は空を見上げるのをやめた。

「悪い。聞いてなかった」

「恋人同士の理想の身長差だよ。十五センチ差が一番だと思わない？」

思わず、葵に目を向ける。

葵はどこか眠そうな目で、どうでもよさそうに小さく笑った。

「五センチあったら十分かな」

「いやいや。十五センチくらいあった方が抱きしめられた時、包まれる感じがあって良

いんだって！」

結衣の目が、俺を見上げる。

「そういえば、瞬矢と私がちようど十五センチ差くらいかな」

自然と、葵に視線がいった。

葵は女子にしては背が高い。

身長差は、五センチほどだった。

「あんまり身長差があると、歩幅合わないんじゃない？」

葵は俺の視線に気づかず、結衣の主張を適当に流していた。

「いや、身長差は絶対必要だつて！ 瞬矢はどれくらいがいいの？」

「……俺も五センチくらいかな」

声が震えた気がした。

結衣が不満そうな声を漏らす。

葵の反応は、怖くて見れなかった。

「えー。二人ともわかってないなあ」

こころごとと表情を変える結衣。

口数の少ない俺と葵を、彼女はいつも持ち前の明るさで振り回す。

「じゃあさ、理想の年齢差は？」

「同い年のほうが話が合つて良いんじゃない？」

葵が即答する。

二人の視線が俺に集まった。

「同学年だな」

答えると、結衣が満足そうに頷いた。

「お、これは満場一致だね。私も同学年がいいなあ」

「意外だな」

つい本音が漏れた。

結衣が首を傾げる。

「なんで？」

「いや、年上が好きなのかと思ってた」

結衣が押し付けてくる少女漫画は、男側が年上の傾向にある。

年上に憧れているのだと思いきんでいた。

「そう？ わたし、年上を好きになったことないよ」

「いつも読んでる漫画は大体年上から迫られるパターンじゃないか」

「あー、あれね。リアルと漫画は別だから」

けろつと言う結衣に、そんなものか、と俺は頷いた。

そこでいつもの分かれ道がやってきた。

結衣の家は、いちばん学校に近い。

「じゃ、また明日ね」

大きく手を振る結衣に、俺と葵は小さく手を振った。

それから、すっかり薄暗くなった住宅街を二人で歩く。

結衣がいなくなると、途端に静かになった。

俺と葵は、決して口数が多いほうではない。

沈黙が落ちるのはいつものことだった。

そして、俺はこの沈黙が好きだった。

幼少期から長い時間を一緒に過ごしてきたため、いまさら気まずく思うような仲でもない。

盗み見るように、隣を歩く葵の横顔を見る。

頼りない街灯の明かりが、暗闇の中に彼女の美貌を照らし出していた。

「瞬矢はさ」

珍しく、葵が沈黙を破った。

「なんで陸上続けなかったの」

陸上。

中学の時は、ずっと短距離をやっていた。

拓海ほどではなかったが、それなりのタイムを持っていた。

「この陸上部は雰囲気悪そうだったから」

半分本音で、半分嘘だった。

陸上を続けなかったのは、帰宅部の結衣や葵と一緒に帰るためだった。

いや、もう誤魔化のはやめよう。

俺は葵と一緒に帰るために、陸上部に入らなかった。

俺と結衣、そして葵の家は近い。

結衣と別れた地点から、約100メートル先に葵の家がある。

100メートル。

中学のタイムは11.32秒だった。

全力で走れば11.32秒で終わる距離が、葵と二人きりになれる唯一の時間だった。

それだけのために、俺は陸上をやめた。

「そっか」

葵が前を向いたまま呟くように言う。

そのとき、強い風が吹いた。

「走ってるどころか、かっこよかったのに」

風に紛れて、そんな声が届いた。

時間が止まった気がした。

薄暗い住宅街で、まわりには誰もいなかった。

頼りない街灯が、俺たちの表情を隠していた。

足を止めた俺に、葵も釣られるように足を止めた。

「葵」

自然と彼女の名前が口から飛び出した。

脳裏には、学校を出る前に聞いた拓海の言葉が蘇っていた。

——俺、彼女ができたんだ。

俺たちはもう、大人になりつつある。

子供のままじゃいられない。

結衣も葵も、ずっと一緒にはいられない。

そのうちそれぞれ彼氏ができて、結婚して、子供を産んで、きっと別々の人生を歩んでいくのだろう。

俺たちは幼馴染で、長い年月を共に過ごしてきた。

願うだけでは、なにも変わらない。なにも発展しない。

行動が必要だった。

「俺や」

葵の眠たそうな目が、街灯の下で不安定な反射を見せていた。

思うように言葉が出てこない。

口の中がカラカラだった。

薄がりの中、首を傾げる葵の視線が痛かった。

「葵のことが、好きだ」

言ってから、ひどい後悔が襲ってきた。

葵の目が、驚いたように僅かに大きくなる。

「付き合ってくれないか」

訪れたのは沈黙だった。

世界中から音が消えたみたいに静かだった。

小さい羽虫が、街灯の下で踊っていた。

葵は困ったように笑って、それからゆっくり唇を開いた。

「えっと」

羽虫が上にのぼっていく。

葵の顔を正面から見れず、俺は不規則に舞う羽虫を目で追っていた。

「いめん」

短い一言。

それだけで十分だった。

俺は言葉を失っていた。

「瞬矢のこと、そういう風に見たことないから」

彼女は気まずそうに視線を落として、それからもう一度呟いた。

「いめん」

俺は何も言えず、ただ立ち尽くしていた。

葵は最後に唇を噛んで、背を向けた。

夜の住宅街に彼女が小走りで去っていく靴音だけが響き、あとには呆けた顔を浮かべて突っ立てる俺だけが残された。

すぐ目の前で、街灯の熱にやられた羽虫が地面に落ちていくのが見えた。

02話 告白(2)

あとに残ったのは、後悔だけだった。

気づけば、自室のベッドで横になっていた。

どうやって帰ってきたのか、記憶になかった。

ただ深い後悔だけが頭の中を占めていて、なにも考えられなかった。

「お兄ちゃん?」

ドアの向こうから、妹の佳矢(かや)の声と足音が届いた。

「帰ってるの?」

ノックもなしに、ドアが開く。

俺は壁側を向いたまま振り返らなかつた。

「あ、いるじゃん」

いつも通りの佳矢の声。

寝た振りをして無視する。

「なに寝てんの?」

ベッドに妹が腰掛ける気配。

それから額に冷たいものが触れた。

驚いて上半身を起こすと、瞬きする妹と目が合った。

「熱もないみたいだけど、なに？ どうしたの？」

「疲れてるんだ」

思わずぶつきらぼうに答えた俺に、佳屋は興味なさそうに「ふうん」と呟いた。

「それより、お母さん夜勤だからいないよ。適当に買ってこいだって」

父は単身赴任で、母は看護師のために夜勤の日は外で適当に買ってくるのが習慣になっていた。

「俺の分はいらない」

食欲なんてなかった。

今はただベッドで無為な時間を過ごしていたかった。

「ダメだって。ちゃんと食べなよ」

妹が顔を覗き込んでくる。

反射的に視線を外すが、遅かった。

「……なにか、あつたの？」

俺の顔を見た妹の表情が凍りつく。

そんなに分かりやすい表情をしていたのだろうか。

「頼む。いまは放っておいてくれないか」

それだけ言うと、妹は黙り込んだ。

何も食べたくないし、喋りたくなかった。

失恋に有効な薬は時間しかない、という言葉はどこかで聞いたことがあった。

多分、その通りなのだろう。

テレビを見ても笑える気がしないし、音楽を聞いても気分が良くなるとは思えなかった。

ただ、傷が癒える時間が欲しかった。

「お兄ちゃん。とりあえずご飯だけ買いにいこう？」

普段からは想像できないほど優しい声色だった。

「無理して全部食べなくてもいいから。でもご飯だけは用意しとこう。ね？」

それ以上邪険にも出来ず、俺は長く息を吐き出してから立ち上がった。

「……そうだな」

顔を見られないように、後ろを向いて服を脱ぐ。

「着替えるから出ていってくれ」

「あ、うん。わかった」

おずおずと妹が出ていく。

着替えながら、ふと鏡に視線を向けた。

ひどい顔が映っていた。

特に目元は充血していて、真っ赤だった。

思わず溜め息が出た。

一度深呼吸して、部屋を出る。

妹は玄関で既に靴を履いて待っていた。

「お、ちよつと元気出てきたじゃん」

そう言つて、佳矢は笑った。

充血している目には触れなかった。その優しさが、心に染みだ。

妹と並んで外に出ると、夜の冷たい風が肌を撫でた。

「うわ、寒っ」

身を縮こませながら早足で歩いていく妹の後ろをついていく。

「今日さー」

俺を励ますためか、佳矢は妙に明るい調子で話をはじめた。

「中学の新井先生つて覚えてる？　なんか浮気したらしくてさ、丸坊主で出勤してきたんだよ」

よく印象に残っている先生だった。

たしか、下ネタが多い人だった。男子からは人気があったが、女子からは不評だった。「妙に真面目な顔してさー、いつもの冗談もナシ。いかにも反省してますって顔を一日中作ってて笑っちゃった」

笑おうとして、うまく笑えなかった。

口角が重く、相槌の声も出なかった。

住宅街に妹の笑い声だけが響く。

「寒いな」

何の意味もない言葉が、自然と零れた。

「うん。寒いね」

沈黙が落ちた。

国道が見えてきて、角にコンビニの明かりがあった。

そのまま無言で店内に入り、奥の弁当売り場を物色する。

食欲はなかったから、適当に安いものを買おうと値段を見比べる。

そのとき、後ろから声がかかった。

「あれ。瞬矢？」

振り返ると、私服姿の結衣が立っていた。いつものポニーテールではなく髪も下ろして、随分と印象が違った。

「結衣も買い物か」

「あ、うん。明日の朝パンにしようと思って」

結衣と話していると、気づいた妹もすぐにやってきた。

「あ、結衣さんだ」

「こんばんは、佳矢ちゃん」

昔は結衣も葵もよく家にあがっていたため、佳矢とはそれなりの仲がいい。

「二人は晩ごはん買いにきたの？」

「ああ。今日は母さんが夜勤だから」

「へえ。なんか作ってあげよっか？」

「いいって。面倒だからズボラしてるだけだし」

断ると、結衣は少しだけ考える素振りをみせた。

「ね、今から家いいっていい？」

突然のことに、少しだけ反応が遅れた。

「なんで？」

「最近行っていないなあって思ってた。どうせ暇でしょ？」

「いや——」

「——大歓迎ですよ、結衣さん！是非きてください！」

断ろうと口を開いたとき、後ろから妹が遮るように大声を出した。
思わず振り返る。

「おい、佳矢」

「いいじゃん。別に暇なんだし」

「じゃあお邪魔しようかな」

結衣がにっこりと言う。

何を言っても無駄だとわかり、俺は抵抗するのをやめた。

「それよりも」

結衣の瞳が、じつと俺に注がれる。

「なにかあったの?」

答えに窮した俺の代わりに、佳矢が冗談を交えて答える。

「お兄ちゃん、えっちな本隠してるのがバレちゃったんです」

「へえ」

結衣の冷たい視線を無視して二人分の弁当をレジに通す。

会計が終わった後、レジ袋を手に二人と一緒に店を出ると結衣は何か楽しいのかにこにここと笑っていた。

「二年ぶりかな。全然変わらないね」

俺の部屋に入ると、結衣は懐かしそうに目を細めた。

彼女の言う通り、ここ二年ほどは結衣も葵も部屋にあげていなかった。

幼馴染とはいえ、互いに年頃を迎えると色々と難しくなってくる。

「それで」

結衣が興味深そうに周囲を見渡す。

「さっき言つてたエッチな本はどこにあるの？」

「いや、ないから」

思わず面倒くさそうに流してしまおうと、結衣は肩を竦めた。

「で、本当はなんなの」

結衣は俺と並ぶようにベッドに腰掛けた。

「なにかあったんでしょ。付き合い長いんだからわかるよ」

自然と視線が落ちた。

そして考える。

どうせ隠しきれることではない。それに同じ幼馴染である結衣にも影響のあることだった。ここで報告しておくべきなのだろう。

深い溜め息をつく。

「笑わないで欲しいんだが」

前置きすると、結衣は神妙に頷いた。

「葵に振られた」

短い沈黙が落ちた。

「冗談でしょ？」

結衣が啞然とした表情で俺を見る。

俺は何も言わなかった。

それでようやく、本当のことだと理解したようだった。

「いつ？」

「帰り道。結衣と分かれた後に」

「……ついさっきじゃん」

結衣の目が動揺したように泳ぐ。

「えっと、ごめん。瞬矢は葵のことが好きだったの？」

「ああ、ずっと前から」

今日何度めかの溜め息が自然と口から飛び出した。

「悪い。たぶん、俺のせいではばらく変な空気になると思う」

明日からのことを考えると、気が重かった。

どうやって接すればいいのか、皆目検討がつかなかった。情けなさがこみあげてくる。

「そっか……ぜんぜん気づかなかった」

結衣は呟くように言つて、あとは沈黙が落ちた。

並ぶようにベッドに腰掛けたまま、互いに何を言つていいか分からなくなつていた。

時計の針の音が妙に大きく聞こえる。

頭の中に靄がかかったみたいで、思考がまとまらない。

「えっと、いま言うべきことじゃないかもしれないけどさ」

不意に、結衣が口を開いた。

言葉を選ぶように、どこか歯切れの悪い様子だった。

「ねえ、私たち付き合つてみない？」

言葉の意味を理解するのに、多少の時間が必要だった。

「付き合う」

反芻すると、結衣は慌てたように言葉を付け足した。

「瞬矢が葵のこと好きで、私のことなんて別になんとも思つてないのは知ってる」

でもね、と結衣は考えるように俯きながら言葉を続けた。

「瞬矢の話を聞いてて、自分でもびっくりするくらい衝撃受けてて」

頷いて、話の続きを促す。

「瞬矢が葵とくつついたかもしれなかったっていうのに、すごい嫉妬みたいなのを感じて。同時に振られたってことに正直安心したの」

結衣の目が、ゆつくりと俺を見上げるように動く。

「瞬矢はさ、葵のことが好きだったんだよね。でも、たとえば私がほかの男の子と付き合ったらどう思う？ 素直に祝福できる？」

うまく想像できなかった。

でも多分、結衣が他の男子と付き合うことになったと報告してきたら動揺するだろう。

娘が嫁にいくときの父親のような複雑な気持ちになるかもしれない。

黙り込んだ俺に、結衣が顔を近づけてくる。

「私たち、ずっと一緒にいたよね。私は出来たらこれからも一緒にいたいって思ってる。瞬矢と葵はちよつと無理だったのかもしれないけど、せめて私は瞬矢とずっと一緒にいたい」

だから、と結衣は言った。

「わたしと、その、お試しいいからさ、付き合ってみない？」

「結衣」

息を吐き出す。

「葵に振られたばかりで、正直結衣のことを真剣に考える余裕なんてない」
けれど。

「でもたしかに、ずっと一緒にいられば、とは思う」

結衣の顔が明るくなった。

「結衣の言う通りだ。結衣が他の男子と付き合うと報告してきたら素直に祝福できないかもしれない。俺たちは随分と長い年月を一緒に過ごしてきた。いまさら恋愛感情なんて自覚するのは難しいが、それに近いものはあるのかもしれない」

姿勢をただし、正面から向き合う。

「こんな俺でよければ頼む」

結衣の目から、透明な雫が落ちた。

「わ、わたし、実は結構前から……」

「……そうか」

俺も随分と前から、葵のことが気になっていた。

結衣も長い時間、ずっと隠していたのだろうか。

幼馴染。

その関係を壊すのは、正直怖かった。

けれど、壊れることはないのかもしれない。

ただ、緩やかに変化していくだけだ。

名前は変わっていくけれど、互いに離れることはない。

俺たちの関係は、壊れなどしない。

この時、俺は本気でそう思っていた。

03話 告白(3)

日付が変わっても、憂鬱な気分は晴れなかった。

それでも、結衣のおかげで少しだけ前向きになることができた。

朝。

いつも通りの時間に起きて、妹の分も合わせて朝食を準備する。

スクランブルエッグをフライパンから皿に移していると、のそのそと妹がリビングに出てきた。

佳矢は俺を見て、一瞬だけ意外そうな顔をした。

しかし、なにも言わず席についた。

「おはよう」

声をかけると、佳矢はぼんやりとした顔で俺を見た。

「牛乳でいいか？」

「あ、うん」

冷蔵庫からパックを出し、コップに注ぐ。

「結衣さんとなにかあったの？」

背後から声がかげられた。

振り返ると、佳矢が真剣な顔で俺を見ていた。

「結衣さんが帰ってから、お兄ちゃんちよつとだけ元気になった」

「そうかな」

「そうだよ」

トーストの焼ける音。

皿に移して、まとめてテーブルに運ぶ。

「ま、いいや」

妹はすぐに興味をなくしたようにトーストにかじりついた。

リモコンに手をのぼし、テレビの電源をつける。

そこでインターフォンが響いた。

「だれ？ こんな時間に？」

妹が不機嫌そうに顔をしかめる。

「俺が出るから」

受話器に付属しているモニターを確認すると、制服姿の結衣が映っていた。

めずらしい。

下校時は毎日一緒に帰っていたが、登校時まではいちいち時間を合わせていない。

「結衣？ どうした？」

『あ、えつとね。一緒に登校しようかなって』

結衣の家のほうが高校に近い。

わざわざ逆方向へ歩いてきたことになる。

「いま開ける」

受話器を置いて、すぐに玄関に向かう。

ドアを開けると、どこか気まずそうな表情を浮かべた結衣が立っていた。

朝の冷たい風が肌に染みる。

「おはよう。急にごめんね」

結衣はそう言って、家の中を覗くように身体を傾けた。

「あの、瞬矢の顔見たくなっちゃって」

佳矢のことを気にしているのか、結衣は小声で囁くように言った。

思わず面食らう。

頬を染めて、恥ずかしそうに上目遣いをする結衣の姿はこれまで見たことがなかった。

「ああ……問題ない。中で待っていてくれ」

外は冷える。

中に入るように促すと、結衣はどこか緊張した様子で頷いて玄関に入った。参った。

いつもと違う結衣に調子が狂う。

結衣とともにリビングに戻ると、佳矢は不思議そうに結衣を見た。

「結衣さん？」

「おはよう、佳矢ちゃん。朝からごめんね」

「ソファに座って待っててくれ。牛乳とコーヒードッチがいい？」

冷蔵庫を漁りながら問いかける。ジュースは切れていた。

「えっと、じゃあ牛乳」

コップに注いで手渡すと、結衣は居心地が悪そうに微笑んだ。

「すぐ食うから」

声をかけてから席に戻り、トーストを齧る。

テレビから流れるどうでもいい情報が沈黙を誤魔化してくれた。

対面の席で、妹はちらちらと結衣を気にするように視線を向けていた。

説明しようかと思つて、結局やめた。

妹も追求しようとはしてこなかった。

朝食を食べ終えて、食器を流しに浸ける。

「着替えてくる」

自室に向かおうとした時、結衣がソファから立ち上がった。

「どうした？」

「うん、ちよつと」

振り向くと、結衣は言葉を濁した。

妹の前では言いづらいことなのだろう。

何も言わず、結衣を連れて自室に入る。

ドアを閉めると、結衣は恥ずかしそうに俺を見上げた。

「えつとさ」

歯切れが悪い。

「今日は急にごめんね。でもこれまで通りだと意識してもらえないかなって思っ

……」

俺たちの関係は変わった。

付き合い方も改めるべきなのだろう。

幼馴染から恋人へ。

互いが意識しないと、たぶん何も変わらない。

「……そうだな。これからは朝も時間を合わせようか」

「うんっ！」

弾けるように笑う結衣に、思わず目が奪われた。

俺は誤魔化すように視線を外して、着替えるから、とぶつきらぼうに言った。

「あ、うん」

部屋を出ていく結衣の後ろ姿を見送りながら、思わず自嘲する。

昨日まで葵のことばかり考えていたというのに、随分と惚れっぽい奴だ。

それから息をついた。

なんとか葵との関係を修復しなければならぬ。



葵と結衣は、俺とは別のクラスだ。

顔を合わせる放課後までは少しだけ猶予がある。

「拓海、ちよつと良いか」

昼休みになると俺はすぐに拓海に声をかけた。

鞆から弁当を取り出していた拓海が不思議そうに俺を見る。

「相談がある。中庭まで来てくれ」

「ああ」

拓海は少しだけ周囲を気にする素振りを見せてから、弁当を持って立ち上がった。混雑する廊下を抜け、人のいない中庭を指す。

季節は秋。

肌寒くなってきた今、外で弁当を食っているやつは少ないはずだった。

「それで、何があった？」

中庭につくなり、拓海はベンチに腰掛けて俺を見上げた。

どこから話すべきか迷い、全て言ってしまうことにした。

「振られた後、どういう対応をしたらいいと思う？」

拓海は怪訝な表情を浮かべた。

「だれに？」

「葵に」

一瞬の沈黙があった。

「いつ？」

「昨日の帰り道だ」

拓海は大きく溜め息をついて、空を見上げた。

「馬鹿野郎。告白は雰囲気の良いデート帰りとかにするもんだろ。互いに暗黙の了解が

ある上で、最終確認でするものなんだ」

呆れたような声色だった。

「一か八かでいきなり告白するなんて中学生のすることだ」

「……その時は、いい雰囲気じゃなかったんだ」

思い返してみると、後悔しなかった。

秋の空色と、誰もいない暗闇で変な気になってしまった。

「それで、失敗した後はどうやって接すればいいと思う？」

拓海の隣に腰掛ける。

「そうだな。向こうの出方次第だろ」

頷く。

たしかに、相手に合わせるしかないのかもしれない。

「例えば相手が露骨に避けてるなら無理に接触する必要はない。反対に相手がいいつも通

りなら——」

そこで拓海は言葉を切った。

彼の視線が俺から外れて、肩越しに誰かを見るように動く。

「瞬矢」

背後から声がした。

振り返ると、葵が立っていた。

冷たい風で、彼女の長髪が大きく舞う。

「東村くん、少しだけ席を外してくれないかな」

葵はいつもの眠そうな目で、穏やかにそう言った。

拓海は弁当を持つて、無言でベンチを立った。

残された俺は、ただ葵をぼんやりと見つめることしかできなかった。

言葉が出てこない。

何を話せばいいのか分からなかった。

「あれから私なりに考えてみたんだ」

葵がゆっくりと近づいてくる。

枯れ枝の折れる音が響いた。

「昨日言った通り、私は瞬矢を異性として見たことがなかった。だから正直、驚いた」

葵は俺のすぐ前で足を止め、言葉を選ぶようにゆっくりと話し始めた。

俺はベンチに座ったまま、無言で葵を見上げていた。

「私たちは幼馴染だ。それ以上でもそれ以下でもない。ただの友達でもないし、ましてや恋人でもない」

けれど、と彼女は微笑んだ。

「これから先はどうだろう、って考えてみたんだ。このまま高校を出て、大学に進学したり就職したりして、それぞれ結婚していく」

珍しく饒舌だった。

いつもの眠そうな目が、正面から俺を見下ろしていた。

「私たちはいつまでも幼馴染ではられない。それぞれ人生の中で一緒に歩いていく最愛のパートナーを見つけたい。結婚すれば異性の幼馴染と頻繁に会うことは難しくなるだろう」

なにか、いやな予感がした。

昨日振られたばかりなのに、葵はどこまでも穏やかな声色で語り続ける。

頭の奥で警鐘が鳴り響いていた。

「いろいろなことを想像した。瞬矢が誰かと付き合って、結婚していく姿。あるいは私が誰かと付き合って、結婚していく姿」

口の中がひどく渴いていた。

胸の奥で得体の知れない恐怖心のようなものが蠢いていた。

「どれもしつくりこなかった。特に瞬矢が誰かと付き合っている姿を想像すると胸が苦しくなった」

まさか。

頭の中が真っ白になっていく。

思考が削ぎ落とされていく。

「私たちはあまりにも長い年月を一緒に過ごしてきた。あまりにも近い距離にいたから、ずっと気づかなかった」

葵が穏やかに微笑む。

対する俺は、表情を凍りつかせていた。

まさか、そんな。

「瞬矢」

冷たい風が吹いた。

体中の体温が奪われいく。

頭の中は信じられないほど冷え切って、何も考えられなかった。

「改めて答えを出そうと思う」

なんで、という思いだけがあった。

これから出てくる答えは俺がずっと望んできたものだった。

けれど、今じゃない。

もう手遅れだった。

「わたしは」

葵の薄い唇がゆつくりと開く。

「瞬矢のことが好き。これからずっと一緒にいてほしい」

いつもの眠そうな葵の表情が、うっすらと恥ずかしそうに赤く染まる。

俺はただ呆然と、彼女を見上げていた。

秋の冷たい風が頬を撫でる。

俺たちの関係は、静かにエラーを吐き出し始めた。

04話 衝突

「わたしは瞬矢のことが好き。これからずっと一緒にいてほしい」

全身の血の気が引いていくのがわかった。

世界中の時間が止まったみたいに、何も考えられなかった。

「昨日はごめん」

葵が近づいてくる。

いつもの眠そうな顔が、すぐそこまで迫っていた。

「もしかして怒ってる？」

怒りなんて、どこにもなかった。

あるのはただ虚しさに似たなにかと、得体の知れない焦燥感だけだった。

俺たちは、どうしようもない過ちを犯そうとしていた。

「瞬矢？　びつくりした？」

葵は小首を傾げて、おかしそうに小さく笑った。

対する俺は、表情を凍りつかせたまま人形のように突っ立っていた。

震える唇を、無理矢理こじ開ける。

「落ち着いて聞いて欲しい」

掠れた声が出た。

自分の声とは思えないほど低い声だった。

「葵とは、付き合えない」

葵が首を傾げたまま、何度か瞬きする。

そして、彼女は微笑んだ。

「どうして？」

葵はまだ、俺の言葉を本気で受け取っていない。

もっと明確な言葉が必要だった。

吹き付ける風が、氣力を削いでいく。

枯れ葉のように、何もかもが落ちていく。

零れていく。

「俺は」

逡巡があった。

言ってしまった方がいいのか、という迷いがあった。

しかし、進むしか道はない。

肺腑の中に冷たい空気を吸い込んで、それから言葉を続ける。

「結衣と付き合うことになった」

葵の表情は、なにも変わらなかつた。

彼女の目は、ただ不思議そうに俺を見つめるだけだつた。

まだ、足りない。

俺は足跡を辿るように、自分の選択と責任と失敗の全てを振り返つて、その全てを彼女に説明しなければならなかつた。

「葵に振られたあと、結衣に告白された」

葵の微笑みが、ゆつくりと崩れていくのが分かつた。

赤く染まっていた頬が、色を失つていく。

「俺は、それを承諾した」

まるで悪夢を見ているかようだつた。

想い人の好意を踏み躪らなければならぬ時が来るなんて、想像したこともなかつた。

俺はいま、一体どんな顔をしているのだろう。

心がざわついて、叫ぶように蠢いて、どうにかなつてしまひそうだつた。

「だから、葵とは付き合えない」

葵は表情を失い、呆然とした様子で俺を見ていた。

彼女の視線を受け止めることができず、俺はゆっくりと視線を落とす。

「どうして」

蚊の鳴くような声だった。

葵は震える声で言う。

「瞬矢は、私のことが好きなんでしょう」

俺は、何も言えなかった。

いつもの余裕のある葵の表情が崩れ去り、瞳が不安そうに揺れていた。

「どうして」

繰り返される言葉に、返す言葉などなかった。

取り返しのつかない失敗をしてしまったのだと、徐々に脳の隅々まで理解が広がり始めていた。

「結衣を」

葵がゆっくりとスマホを取り出す。

「結衣を、呼ばないと」

「……葵」

制止の声を無視して、葵はスマホを耳に当てた。

「結衣、中庭に来て」

短くそれだけ言って、葵はすぐにスマホを耳から離した。

「ねえ」

だらりとぶら下がった手でスマホを掴みながら、葵が口を開く。

「私は瞬矢が好きで、瞬矢は私のことが好き。そうだよね」

「……葵」

目眩がした。

「俺は、結衣と付き合うことになったんだ」

「……どうして」

葵の顔色がどんどん色を失っていく。

多分、俺も同じような顔をしているのだろう。

どこにも適切な言葉が見つからず、俺たちは互いをただ見つめることしか出来なかった。

葵の目がゆっくりと俺の後ろを見る。

振り返ると、結衣が立っていた。

彼女は俺と葵を見て、表情を硬くしていた。

「ねえ、結衣」

先に口を開いたのは葵だった。

「瞬矢と付き合うことになったって本当なの？」

「……そうだけど」

どこか警戒するように、結衣は低い声で答えた。

きつと、この場の只ならぬ空気に気づいているのだろう。

結衣の返答に、葵は一瞬笑おうとして失敗したような顔を浮かべた。

「お願いがあるんだけど」

葵の目が、俺を見る。

「身を引いてくれないかな。私と瞬矢、両思いなんだ」

「……なにそれ？」

結衣の目にはつきりと、怒りの色が宿る。

俺は大きく息を吸い込んで、ゆっくりと言葉を吐き出した。

「葵、やめろ」

「どうして？」

葵が首を傾げる。

「だって、昨日の帰り道で瞬矢は言ったでしょう。私のことが好きだって」

それなのに、と葵が結衣を睨みつける。

「どうして結衣と付き合うなんて事になってるの？」

「それは——」

「——経緯なんてどうでもいい」

全てで説明しようと口を開くと、葵がそれを制止した。

「どうでもいいの。ただ、私はこう言いたい。なんで結衣が割り込みしてきてるの？」

「割り込みって……」

結衣が言葉を失ったように眩く。

「わたしは……わたしは瞬矢に気持ちを伝えただけだよ。葵になにか言われる筋合いなんてないッ！」

それに、と結衣は俺を見た。

「瞬矢は私の気持ちを受け止めてくれた。付き合おうって言うてくれた。もう葵は関係ないでしょッ！」

葵の昏い目が、俺を見る。

「でも、瞬矢はまだ私のことが好きでしょう？」

俺は、何も言えなかった。

結衣の瞳が不安そうに揺れる。

葵は薄い笑みを浮かべて、言葉を続けた。

「だったらこうすればいい。この場で結衣と別れば解決じゃない？」

05話 衝突(2)

「だったらこうすればいい。この場で結衣と別れば解決じゃない?」

まるで悪い夢を見ているようだった。

言葉が、出てこない。

ひどい目眩がして、視界が何度も大きく揺れた。

「なんでそんなこと言うのッ!? 葵に関係ないでしょッ!」

「関係ないのは結衣の方だ。私と瞬矢は両思いで、結衣は片思いしてるだけ。そっちが身を引くのが当然じゃない?」

二人の怒声が、妙に遠く聞こえた。

胃の中に鉛が詰まったみたいに身体が重い。

とくとくと脈打つ心臓の存在感が、全ての現実感を押し流していく。

「ちがうッ! 瞬矢は私を受け入れてくれたッ!」

「そうかな。どうせ落ち込んでいる瞬矢につけこんだだけでしょ?」

物心ついた時から続いてきた俺たちの関係は、破綻を迎えようとしていた。

ほんの少しのすれ違いが、どうしようもないほど膨れ上がって破裂しようとしてい

た。

頭が動かない。

渴いた喉を潤そうと、半ば義務的に唾を飲み込む。

起きた間違いは、もう正せない。

ならば、後は筋を通すしかない。

「葵」

ゆつくりと息を吐き出す。

声を荒げていた葵と結衣が口を閉ざし、俺を見る。

二人の瞳には、不安の色があった。

きつと、俺も似たような目をしているのだろう。

「葵は一度、明確な否定を口にしたはずだ」

葵の表情が固まるのが分かった。

結衣は次の俺の言葉を待つように黙っている。

「俺は一度、結衣の好意を明確に受け入れた」

だから、と全てを言い切る。

「それが全てだ。それ以外は何もない。葵と付き合うことはできない」

結衣の顔一面に喜色が広がっていく。

対する葵は呆然とした様子で俺を見ていた。

「葵……本当に悪いと思ってる」

秋の澄んだ風が俺たちの間を駆けていく。

あとには静寂だけが残った。

喧騒は遠く、まるで俺たちだけが世界から取り残されたようだった。

葵の眼球が、舐めるように俺と結衣を交互に見る。

彼女の唇が、震えるように動いた。

静寂を破るわけではなく、静寂に溶けるようにゆつくりと。

「最後にひとつだけ、聞いていいかな」

葵の端正な顔が、歪んだ。

歪み、としか形容しようのないそれは、どこか底知れない感情を俺に抱かせた。

仄暗い視線が、刺すように俺に向けられる。

「瞬矢は、まだ私のことが好きなんだよね」

それはどこか確信めいた言い方だった。

俺は、答えられなかった。

その沈黙こそが答えだというのに、否定の言葉を口に出ることが出来なかった。

視界の隅で、結衣が不安そうに俺を見ていた。

「俺は……」

言葉が続かなかった。

正しい言葉が、頭に浮かばない。

黙り込んだ俺を見て、葵は笑みを深くした。

「そう。瞬矢の気持ちは分かったから最後まで言わなくていいよ」

そして葵は幼い少女のようにくすくすと笑った。

「今は結衣に預けてあげる」

葵は踵を返して、それから最後に振り返って微笑んだ。

「私は大人しく順番待ちしているよ」

すらりとした葵の背中が遠ざかっていく。

中庭に残された俺たちは言葉を交わすこともなく、しばらくの間じっとしていた。

「瞬矢……」

結衣が蚊の鳴くような声で俺の名前を呼ぶ。

「……ああ」

無意味な言葉の羅列が口から飛び出した。

「寒いね」

「……ああ」

「中、入ろっか」

結衣の声に被さるるようにチャイムが鳴る。

俺たちは重い足取りで校舎に向かった。



「カラオケでも行くか?」

授業が終わり、クラスメイトがぞろぞろ教室から出ていく。

喧騒の中、拓海が小声で声をかけてきた。

ぼんやりと帰り支度をしていた俺は、少しだけ反応が遅れた。

「カラオケ?」

「あれからまた何かあったんだろ。話してみろよ」

「……いや、今日はいい。少し時間をくれないか」

話しても気持ち晴れるとは到底思えなかった。

好意を無碍にする形になるが、鞆を持ってそのまま立ち上がる。

「そうか。何かあったら言えよ」

「ああ、悪いな。また明日」

拓海に軽く手を振ってから戸口に目を向けると、廊下に結衣が立っていた。葵の姿はない。

俺はクラスメイトの間を縫うように歩いて結衣の元に向かった。

「葵は？」

俺たちはいつも三人で一緒に帰っていた。

「……先に帰ったみたい」

「そうか」

当然と言えば当然なのだろう。

俺たちはそれ以上何も言わなかった。

無言のまま校舎を出る。

茜色に染まる空に、うろこ雲が浮かんでいた。

葵に振られ、結衣に告白された昨日と似た空模様だった。

「瞬矢は」

不意に結衣が沈黙を破った。

「葵のことが、まだ好きなんだよね」

葵が最後に残した言葉は、まるで呪いのようだった。

それは深く打ち込まれた楔に似ていて、簡単には抜けそうにない。

「俺は——」

「——いいの」

答えようとした俺を、結衣が制止する。

「うん。一日で好きだった心が変わるはずなんてないもの。だから、いいの」

それは俺に向けた言葉ではなく、自分自身に言い聞かせているようだった。

「私はこれから、少しずつ頑張るから。瞬矢が私のことを好きだって言ってくれるように頑張るから」

だから、と結衣は俺を見上げた。

「すぐに見捨てないで、長い目で見てくれると嬉しいな」

結衣の瞳は、不安に揺れている。

しかし、視線は俺に向けられたまま離れない。

彼女の真つ直ぐな心に、俺は何と返せばいいのだろう。

元来、俺はあまり口数が多いほうではない。

この場に相応しい言葉も、彼女が喜ぶ言葉も思い浮かばない。

だから、行動で示すことにした。

すぐ近くで揺れていた彼女の手をそつと握る。

「……あ、っ……」

驚いたように結衣が声をあげる。

俺は思わず視線を外して、真っ直ぐと続く住宅街を見つめた。

「こうして手を繋いで歩くのは、何年ぶりだろうな」

「……七年ぶりだよ。くつつくのを瞬矢が嫌がったから、私は嫌々やめたんだよ」

「そうだったかな」

小さい頃はこうしてよく手を繋いでいた気がする。

俺たちは、本当に長い年月を一緒に過ごしてきた。

「私はあの頃から、ずっと……」

結衣の言葉で思い出したのは、葵の顔だった。

べったりするのを嫌がるようにはなったのは、俺が葵を意識するようになったからだ。だった。

「私は、ずっと瞬矢のことが……」

繋いだ手が、一度離れた。

それから、より深く繋がろうとするように指先が絡まる。

「小さい時はいっぱい手を繋いだけれど、こういう風に手を繋ぐのは初めてだよね」

そう言つて、結衣は嬉しそうにはにかんだ。その頬は夕陽に負けないくらい赤く染まっている。

次第に結衣の家が近づいてくる。

——瞬矢は、葵のことがまだ好きなんだよね。

結衣の震える声と、不安に揺れる瞳が脳裏に蘇った。

「結衣。久しぶりに家に寄つてもいいか？」

「え？ わたしの家？」

結衣が驚いたように俺を見上げる。

「えつと、うん、いいけど、お母さんいるよ？」

「ああ。久しぶりに挨拶したい」

「あ、うん。えつと、本当に何もないけど……」

結衣が動揺した様子を見せているうちに、彼女の家がすぐそこまで近づいてくる。

どこかそわそわした様子で結衣は繋いでいた手を離し、鍵を取り出した。

「あの、どうぞ」

玄関扉を開けて、結衣が中に入るように俺を促す。

「ああ。おじゃまします」

声をかけてから玄関で靴を脱ぐ。

懐かしい匂いがした。

結衣の家にあがったのは小学生の時以来だった。

「お母さん！ 久しぶりに瞬矢連れてきたよ！」

後ろで鍵を施錠しながら結衣が叫ぶ。すぐに奥から彼女の母親がやってきた。

「あらあら。瞬矢くん？ 久しぶりねえ」

結衣の母親、舞さんとは昔から何度も顔を合わせている。

久しぶりに見る姿は、昔よりやや肉付きが良くなつたように見えた。

「お久しぶりです」

小さく頭を下げる。

それから大きく息を吸った。

結衣は、俺たちの関係に不安を覚えている。

ならば、吹き飛ばす必要があつた。

「今日はひとつ、大きな報告があるんです」

「報告？」

不思議そうに首を傾げる舞さん。

「ちよ、ちよつと瞬矢？」

結衣の慌てたような声。

俺はそれを無視して、舞さんを正面から真つ直ぐ見つめて口を開いた。

「実は結衣と交際することになりました、今日は改めてそのご挨拶に参りました」

06話 破壊

「実は結衣と交際することになりました、今日は改めてそのご挨拶に参りました」
頭を下げた後、数拍の沈黙があつた。

「あらあら。うちの結衣と？」

舞さんの驚いたような声。

顔をあげると、舞さんは目を大きくしながらも穏やかな笑みを浮かべていた。

「結衣は昔から瞬矢くんに熱い視線を向けていたものね」

からかうように言う舞さんに、後ろから結衣が顔を赤くして抗議の声をあげる。

「ちよ、ちよつとお母さん！ やめてよ！」

「だってそうでしょう。あなた、小さい時に瞬矢くんから貰った消しゴムとか鉛筆、なんでも大事そうに保管しているじゃない」

「わああ！ ああああつ！」

舞さんの声を掻き消すように結衣が大声をあげた。

俺は言葉に窮して、思わず苦笑した。

「もういいからっ！ お母さんはあっち行ってっ！」

結衣が舞さんをリビングの方に押していく。

舞さんはどこか仕方なさそうに肩を竦めて俺に視線を向けた。

「ゆっくりして行つてね。あとでお茶を持っていくから」

「はい。ありがとうございます」

軽く頭を下げると、結衣が戻ってきて俺の手を握った。

「ねえ、早く部屋行こ」

「ああ」

結衣に引つ張られるようにして二階へ続く階段をのぼる。

懐かしい。

小学生の時はこうして互いの家をよく行き来していた。

階段をのぼりきつたすぐ手前の部屋が結衣の部屋だった。

「ごめん。何も無いけど」

そう言いながら結衣が部屋の扉を開ける。

まず記憶通りの勉強机とベッドが目に入った。

それから見たことのないカーテンとラグ。それだけで随分と印象が違って見えた。

室内に足を踏み入れ、ゆっくりと中を見渡す。

勉強机の引き出しに、昔貼ったシールがそのままになっていた。

「このシール、おかしのオマケだったっけ」

昔流行ったキャラクターだった。

当時の俺たちは何故かこのシールを集め、互いに交換を繰り返していた。

「うん。懐かしいでしょ」

結衣が笑いながらベッドに腰掛ける。

俺は頷いて、それから勉強机の上にある写真立てを見て思わず動きを止めた。

俺と結衣、そして葵の写真だった。

幼稚園の頃だろうか。

正門の前で三人仲良く並んで、手を取り合っていた。

真ん中には、当然のように結衣がいる。

俺も葵も、昔から活発的な方ではなかった。結衣がリーダーのような存在になって大

人しい俺たちを引っ張ってくれていた。

写真の向こうで、葵は表情が乏しいながらも笑っている。

どこか眠そうな表情は、今も昔も変わらない。

昔から、ずっとそうだった。

他人と距離をとって、静かに本を読んでいるタイプだった。

いつも集団で行動している他の女子とは、雰囲気違った。

結衣がない時、俺たちは他の子供たちと違って静かに過ごしていた。

そういう遊び方ができる友人は、他に誰一人いなかった。特別だったと言い換えてもいい。

だから俺は自然と――

「……その写真」

俺の視線に気づいた結衣が声をあげる。

「卒園式のやつだっけ？」

「さあ。どうだっただろう」

俺たちは、ずっと一緒にだった。

共に過ごした行事なんて多すぎて、どれがどの写真だか正確には分からない。

「幼稚園のときは、よくママゴトをしたよね」

「……どうだったかな」

記憶の糸を辿る、

結衣が妙に豪華なままごとセットを持っていたような気がした。

「たしか、大きい家のセットみたいなものを持っていたな」

「そうそう！ 私がお母さんと、瞬矢がお父さんだったの」

配役までは記憶になかった。

結衣がベッドから立ち上がって、俺の横に立つ。

「結婚式もやったんだよ」

そう言つて、彼女は一番上の引き出しを開けた。

「ほら、これ。瞬矢が私にくれた指輪」

彼女が取り出したのは、いかにも安っぽいおもちゃの指輪だった。

「誓いのキスもやったよね。今思えばマセてるなあ」

「……覚えていないな」

結衣が不満そうに唇を尖らせる。

「絶対やったよ。わたし、覚えてるもん」

彼女の瞳が、正面から俺を見上げる。

「忘れてるなら——」

声色が、少しだけ変わった。

交差した視線が、鎖のように俺の動きを止めた。

「——もう一度、ここでしてみる？」

どこか冗談っぽい言い方だった。

しかし、彼女の瞳はしつとりと濡れていて、瞬きすらせずに俺を真っ直ぐ見つめて
る。

そこにあるのは、紛れもない期待の色だった。

結衣との距離が近いことに、今更のように気づく。

少しだけ肩を抱いて引き寄せてしまえば、それだけで俺たちの距離はゼロになる。十五センチ。

俺と結衣の身長差を埋めるように、結衣は少しだけ俺を見上げるようにしていた。全ての環境が整えられ、あとは俺が動くだけだった。

「結衣……」

視界の隅の写真立てにふと意識が向いた。

仲良く並んで笑う三人。

何よりも大事だったもの。

俺たちの根底をなしてきたもの。

ゆっくりと息を吐き出す。

「結衣、全て片付いてからにしよう」

彼女の瞳が、動揺したように揺れる。

「葵との関係を修復して、それからにしよう」

俺たちは、長い年月を共に過ごしてきた。

喧嘩だって、何度もあった。

今回だって、大丈夫なはずだった。

「少しだけ、頭を冷やす時間が必要だと思う。けれど、このままの状態は良くない」
期待するように俺を見上げていた結衣の顔が、俯くように沈んでいく。

「……できるかな」

「少しだけ時間を置いて、それからちゃんと話し合おう。放置していい問題じゃない」
「……うん」

結衣の瞳が俯いたまま左右に揺れる。

「でも、悪いのは葵だよ。あんな言い方するなんて……」

それに、と結衣の顔に怒りの色が浮かんた。

「瞬矢と別れる、なんて許せない。あまりにも勝手じゃない？」

「……ああ。そうだな」

数日、置く必要がありそうだった。

人の怒りは長続きしない。必ずどこかで許容ラインを下回る時がくる。

しかるべき時に話し合いの場を設ければ、問題は解決するはずだった。

結衣と葵は親友だ。俺なんかが原因で二人の関係を破綻させるわけにはいかない。



結衣の家を出ると、外はすっかり暗くなっていた。

冷たい風が頬を撫でる。

いつもは葵と並んで歩く帰り道。

約100メートル。

ふと、足を止める。

——どうして陸上をやめたんだ？ お前ならインハイだって行けただろう。

この前久しぶりに会った中学の顧問の声が脳裏をよぎった。

100メートル。

中学のタイムは11.32秒だった。

深く息を吐き出して、身体を沈める。

手をついたアスファルトが、冷たかった。

肩に担いだ鞆がずり落ちそうになり、腋で抱えて不格好になった。

——走つてるところ、かっこよかったのに。

目を閉じる。

瞼の裏に、広いトラックが広がった。

号砲は響かない。

呼吸を止めると同時に地面を蹴り出す。
抱えた鞆が大きく揺れて重心がずれた。

風が唸る。

冷気が肌を刺した。

太腿の筋肉が肥大化したような錯覚とともに、制服のズボンを押し上げる。

流れる視界が爽快だった。

アスファルトの上を走るの、膝によくない。

しかし、もう関係ない。

俺は、陸上をやめた。

このたった100メートルのために。

一瞬で終わってしまう、この区間のためだけに。

足を止める。

目の前に葵の家があった。

息を吐きだし、彼女の家を見上げる。

まだ明かりがついていなかった。寄り道しているのだろうか。

「陸上か」

眩きが漏れた。

俺は、一体何をやってているんだろう。全てが半端だった。

だからこそ、結衣と葵の仲だけでも修復しなければならぬ。それだけは、半端な対応は出来ない。

葵の家から目を離し、歩き出す。

少しだけ走ったせいとか、身体が熱かった。

すぐに家に辿り着き、鍵を取り出して解錠する。

玄関ドアを開けると、見慣れないローファーが視界に飛び込んできた。

思わず動きを止める。

「おかえり」

声が出た。

知っている声だった。

どこか眠そうで、それでいて大人びた声。

綺麗に揃えられたローファーから、視線をあげる。

眠そうな顔で微笑む葵の姿が、そこにあつた。

「遅かったね」

彼女はそう言つてクスツ、と笑つた。

「お、帰ってきた」

奥から母の声がした。

夜勤明けなのに、それを感じさせない明るい表情で奥から歩いてくる。

状況を理解出来ずにいる俺に向かって、母は嬉しそうに口を開いた。

「あんた、葵ちゃんに告白したんだって？ いやあ、もうそんな年頃なんだねえ」

全身の血が引いていくのがわかった。

俺はただ、呆然と葵に視線を向けることしか出来なかつた。

彼女はいつもの眠そうな表情に加え、どこか昏い目を俺に向けていた。

「荷物、持とうか」

抱えていた鞆が、葵の手に引つ張られる。

俺は言葉を失って、玄関に突っ立っている事しか出来なかつた。

「いやあ、葵ちゃんならしっかりしてるし安心だねえ」

母親はそう言つて、俺の背中を押してくる。

「今日はお前取つたからね。ちよつと豪華だよ」

リビングに押し出されるように向かうと、ソファに座っていた佳矢と目が合った。

「やるじゃん」

妹はからかうように、そう言つて笑つた。

俺は未だ、状況を理解できずにいた。

言葉が見つからない。

「大丈夫だよ」

後ろから葵の囁く声。

「瞬矢の気持ちは分かっているから」

けれど、と葵は言う。

「瞬矢は昔から、周囲のために自分の気持ちを殺すところがあつたよね。だから、背中を押してあげることにしたの」

葵の声が、脳髓に溶けていく。

どこか眠そうな声色が、ゆっくりと染み込んでいく。

「私が悪者になって、全てのしがらみを壊してあげる」

07話 連鎖

「私が悪者になって、全てのしがらみを壊してあげる」

耳元で囁かれた葵の言葉に、意識が眩んだ。

状況を漠然と理解すると同時に、胃の中に鉛が流し込まれたような錯覚を覚える。

「ほら、美味しそうだよ」

金縛りにあったように動けない俺に、葵が耳元で言葉を続ける。

テーブルの上には出前の寿司が並んでいて、母は既に席について俺たちの方をニコニコと見つめていた。

佳矢がソファから立ち上がって、背伸びしながらテーブルに向かう。

「さあ、一緒に食べよう」

とん、と背中を押される。

俺は操り人形のようにリビングに足を進め、いつもの席についた。

思考が奪われたように何も考えることができなかつた。

「ところで瞬矢、善治さんにはもう報告したの？」

母が機嫌良さそうに問いかけてくる。

善治さん。葵の父親だった。

母親の美樹さんは五年前に亡くなっていて、今は善治さんと二人暮らしになっている。

「葵ちゃんを見習いなさいよ。ちゃんと挨拶に来てくれたんだから。あんたも善治さんにもちやんとご挨拶しないと」

「……ああ」

掠れた声が、喉から漏れた。

頭が回らない。

どう行動すべきなのか、どう振る舞うべきなのか、皆目検討もつかなかった。

「いやあ、それにしても幼馴染同士で付き合うなんてあるのねえ。なんだかドラマみたいじゃない?」

「私にもイケメンの幼馴染がいたら良かったのに」

佳矢が不満そうに言いながら寿司に箸をのばす。

「あんたは女同士でしか遊んでなかったものね。あ、葵ちゃんも食べてね」

思考が定まらないうちに、どんどん状況が進んでいく。

得体の知れない焦燥感と不安感が縋い交ぜになって、巨大な何かになって膨れ上がっていく。

気づけば、全身が汗でぐっしよりと濡れていた。

体温と同時に思考が奪われて蒸発していくような錯覚があった。

「母さん」

震える声で、口を開く。

母が不思議そうに俺を見た。

「俺は」

言わなければならなかった。

全ては葵の嘘なのだ。俺は結衣と付き合う事になったのだと。

渴き切った喉を、その為に震わせなければならなかった。

「俺は——」

「——ねえ、瞬矢」

俺の声を遮るように、横から葵の声が届いた。

視線を向けると、いつもの眠たそうな顔がそこにあつた。

「私、嬉しかったよ」

いつもの眠そうな表情。

僅かに開いた瞳孔だけが、いつもと違った。

「はじめは確かに動揺したけど、嬉しかったんだ。帰ってから、ずっと瞬矢の言葉を思い

出してた」

そう言つて、葵は微笑んだ。

「だから私は、ずっと瞬矢と一緒にいたいって心からそう思ったの」
言葉が出てこなかった。

体温も、思考も、言葉も全てがどこかへ消え去つていった。

一度は開いた口が、自然と閉じる。

それを見て葵は笑みを深くした。

「もう葵さん、こんなところでノ口けないでくださいよ」

佳矢が顔をしかめて手をひらひらとさせる。

母の笑い声が重なり、和やかな雰囲気が増した。

俺は渴いた笑い声をあげて、目の前の寿司に箸をのばした。

そのまま、口に出しかけた言葉と一緒に飲み込む。

「ねえ、美味しい？」

すぐ隣で、葵が首を傾げる。

味は、何一つしなかった。



「……どういふつもりだ？」

夕食後、葵を自室に呼び出すと彼女はいつもの眠そうな表情で俺を見た。

「どういふつもりって？」

葵はそう言って、ゆっくりと部屋を見渡す。

「昔とあまり変わらないね」

彼女が眼の前を通った時、柔軟剤の甘い香りがした。

「葵とは付き合えないと言ったはずだ」

「そうだったかな」

とぼとけるような言葉とともに、葵は薄い笑みを浮かべた。

「嘘は言っていないよ。おぼさんには瞬矢から告白されたって言っただけ」

葵の眼球が、俺を舐めるように動く。

「そして、私も好きだって伝えた。それだけ。とてもシンプルな話じゃない？」

「葵……俺たちは——」

「——ねえ」

俺の言葉を遮るように、葵が静かに口を開く。

「二人つきりだね」

言葉が出なかつた。

沈黙が落ち、同時に葵がクスクスと笑う。

「当ててみせようか。瞬矢はいま、きつと緊張してる」

葵がゆつくりと動く。俺を見つめながら、弧を描くように。

「心拍数があがつて、どきどきしてる。少しだけ発汗もあるはず」

葵の細い指先が、俺の頬を撫でた。

そつと頸動脈に沿うように首筋に落ちていく。

「やっぱり。少しだけ脈が早いし汗ばんでる」

「葵」

一歩、後ずさる。

葵はいつもの眠たそうな表情でクスクスと笑つて、それからすぐに笑うのをやめた。

「ねえ」

どこか真剣な顔で、彼女は切り出した。

僅かに開いた瞳孔が、真つ直ぐ俺に向けられていた。

「きつと私も同じ。確かめてみる？」

葵の手が、制服の第一ボタンにのびた。

ゆつくりとボタンが外され、鎖骨が覗いた。

大人びた葵の顔つきが、普段よりも色っぽく見えた。

「葵、やめるんだ」

俺の言葉に葵は手を止め、それから不意をつくように一步前に出た。

彼女の細い指先が、再び俺の首筋に添えられる。

「脈、あがってる。汗だって」

すぐ目の前で、葵がクスクスと笑う。

甘い吐息が首筋にかかった。

「やっぱり瞬矢は私のことが好きで、意識してるんだ」

返す言葉が見つからない中、葵が言葉を続ける。

「昔から瞬矢の心の天秤は、常に良心と常識に傾いてる。瞬矢はいつだって自分の気持ちの優先度を一番下にしてる。損な生き方をしてるって、私は知ってる」

だから、と葵は俺を見上げた。

「その天秤を、私が壊してあげるの。粉々にして、瞬矢が正直になれるようにしてあげる」

葵は最後に穏やかな笑みを浮かべて、それから後ろに下がった。

「今日はもう帰るよ。続きはまた今度ね」

踵を返して部屋から出ていく葵を、俺は黙って見送ることしかできなかった。



雨が降っていた。

秋の雨は、身に染みるように冷たい。

台風が近づいているのだと朝の天気予報でやっていた。

俺は傘を差して、早足で校門をくぐった。

下駄箱は大勢の生徒で溢れていた。

傘の水気を落として靴を履き替える。

ズボンが水を吸って重くなっていった。

ハンカチで水気を吸ってから教室に向かい、引き戸を開ける。

途端、それまで騒がしかった教室が静かになった。同時に教室中の視線が集まる。

奇異の視線だった。

想定外の事態に、俺は思わず動きを止めた。

「瞬矢」

教室の奥から拓海が向かってくる。

「ちよっと良いか」

拓海は俺を廊下に押し出すと、そのまま耳打ちするように小声で話し始めた。

「なあ、昨日の昼休み、長宮に告白して失敗したって言ってたよな？」

「……ああ」

話が見えない。

短く頷くと、拓海は周囲を気にするような素振りを見せてから更に声を小さくして言った。

「お前、昨日の今日でどうなってるんだ？ 葛城がお前と付き合うことになったって学年中に言い触らしてるぞ」

08話 拡散

「お前、昨日の今日でどうなってるんだ？ 葛城がお前と付き合うことになったって学年中に言い触らしてるぞ」

自然と息が止まった。

同時に肩が叩かれる。

振り返ると、同じクラスの女子が立っていた。

「西寺くん、聞いたよ。結衣と付き合うことになったんだって？」

彼女はにんまりと笑って、小首を傾げた。

「ね。どつちから告白したの？」

向けられる好奇の目に、俺は思わず視線を逸らした。

「……悪い。後にしてくれ」

拓海と女子に背中を向け、結衣と葵がいる隣のクラスに向かう。

引き戸を開けると、一斉に視線が集まった。一部の女子が囁し立てるような声をあげる。

俺はそれを見無視して、教室を見渡した。窓際に座っている結衣とすぐに目があつた。

「結衣。ちょっといいか」

名前を呼ぶと、周囲の女子が黄色い声をあげた。

どこか嬉しそうな顔で、結衣がそばまで寄ってくる。

「なに、どうしたの？」

「場所を変えたい」

ここは周囲の目が多すぎる。

廊下に出て、真つ直ぐ階段を下りていく。

教室に向かう生徒たちと逆行しながら、誰もいない別棟との渡り廊下で足を止める。

「ひとつ確認したい。周りに話したのか？」

結衣は何度か目を瞬いた後、弾けるような笑みを見せた。

「私たちのことだよ？ うん、話したよ」

「……葵を刺激することになる。和解するまでは控えてくれないか」

途端、結衣の笑みが消えた。

「なんでそこまで葵に配慮しないとイケないの？」

結衣の目に、怒りの色が宿る。

「葵はもう関係ないでしょ。あとは私たちの問題じゃない？」

「……結衣。葵との関係は、放置していい問題じゃない」

「知らない。そもそも葵の身勝手な行動が発端でしょ。それに——」
結衣の表情に、僅かに不安が混じった。

「——なんだか嫌な予感がするの。葵つてたまに何考えてるか分からないから、根回ししておいた方がいいかなって」

俺はそれ以上、何も言えなかつた。

結衣の勘は当たっている。葵は既に、取り返しをつかない行動を開始していた。

「そろそろ時間だし、戻るね」

これ以上の問答を拒絶するように、結衣が踵を返す。

去っていく背中を、俺は黙って見送ることしかできなかつた。

俺たち三人の関係は、どうしようもないほど捻れ始めている。

すでに周囲を巻き込み始めていて、事態が長期化すれば泥沼になるのは明白だった。

なにか、手を打つ必要があつた。

「結衣は昔から変わらないね」

後ろから、声がかけられた。

振り返ると、暗い渡り廊下の向こうから葵が歩いてくるところだった。

いつもの眠そうな目が、暗がりの中から俺を見ていた。

「結衣は昔から周りを味方にしようとする小賢しいところがあつた」

でも、と葵の唇の端が釣り上がる。

「周囲の評価を気にしない人間だっっていっばいい。私と瞬矢は、特にそのタイプだ。だから私たちはいつも一緒だった」

静かな声だった。

それなのに、不思議と威圧感があった。

「覚えてる？ 結衣はカラオケが好きだったけれど、私はカラオケが嫌いだった」

たしか、それで喧嘩したこともあったはずだ。

「瞬矢はいつも私に気を遣って、結衣の誘いを断ってた。そのうち結衣は私に対して怒りを向けるようになった」

そうだった。

結衣の怒りは、なぜか葵に向けられた。

「あの時も、結衣は周囲を味方につけようとした」

けれど、と葵の瞳孔が開く。

「瞬矢は結局、私と一緒にいた。結衣の誘いには乗らなかつた」

そんなこともあった。

たしか、中学三年生の夏だった。

夏季休暇が終わり、それぞれが受験に向かい始めていた。

「中学最後の思い出作りにみんなでカラオケ行こうよ」

言い出したのは、結衣だった。

彼女は昔から、クラスの中心に立っていた。そんな結衣の言葉で、クラス中の女子が賛成の意を次々と示していった。

俺はそれを遠くから見守りながら、まずいな、と思った。

数日前に、頑なにカラオケに行きたがらない葵と結衣が喧嘩したばかりだった。流れをつくって、何としてでも葵と俺をカラオケに誘うつもりなのだろう。

女子の大半が賛成の意を示したところで、次は男子に声がかかり始めた。

「行くひとー!」

結衣が声を張り上げる。

既に女子の大半が行く事が決定しており、断れる空気ではなかった。

興味なさそうな奴らも、次々手をあげていく。

結衣は得意そうな顔でクラス中を見渡していた。

「葵も行くよね?」

そこでようやく、葵に声がかかった。

窓際の席で静かに本を読んでいた葵は、僅かに鬱陶しそうな素振りでも顔をあげた。

既に大半のクラスメイトが参加することになっていて、クラス中の視線が葵に集まっ

た。

「私はいい」

短い一言だった。

それまでの流れに反する態度に、場の空気が固まった気がした。

結衣の表情から笑みが消え、何かを言おうと口が開きかかる。

そこで俺は椅子から立ち上がった。

クラス中の視線が俺に集まる。

「俺もやめておくよ」

凄い音痴なんだ、と付け加える。

「えー、西寺くんもー?」

騒がしい女子の一人が、文句の声をあげる。

「下手でも大丈夫だって。全然気にしないから!」

「悪い。本当に苦手なんだ」

愛想笑いを浮かべ、肩を竦めてみせる。

ちらりと結衣の方へ目を向けると、彼女は表情のない顔でじつと俺を見ていた。

それを皮切りに、数人の男子が不参加を表明する。

結衣を中心とした参加組がぞろぞろと教室から出ていくのを見送りながら、俺は椅子

に座り直して小さく息をついた。

「瞬矢も行けば良かったのに」

後ろから、葵の声がした。

「歌、下手じゃないはず。東村くんたちと一緒に رفتるの知ってるよ」

「気分じゃなかったんだ」

振り返ると、葵は読んでいた本を畳んで俺のことをじつと見つめていた。

不参加だった数人の男子も教室から出ていき、いつの間にか教室には俺と葵の二人しかいなかった。

「私は別に一人でも平気だから」

「俺もだよ」

答えると、葵は一瞬きよんとした顔をしてから薄い笑みを浮かべた。

「なにそれ」

「さあ」

そこで会話が途切れた。

葵は再び本を開いて、視線を落とした。

俺は窓から校庭をぼんやりと見下ろしていた。

広い教室には、俺たちしかない。

長い沈黙があった。

俺も葵も、口数が多い方ではない。

いつものことだった。

そして、俺はこの沈黙が嫌いじゃなかった。どこか心地良さすら感じていた。

ふと、葵に目をやる。

静かに本を読む葵の顔は、人形のように整っていて綺麗だった。

葵も、同じことを感じているのだろうか。

この沈黙を、心地良いと感じてくれているのだろうか。

そうならいいのに、と心から思った。

俺の視線に気づいた葵が顔をあげる。

「なに？」

「カラオケ、二人だけで行くか？」

葵は一瞬驚いたような顔をしていて、それからいつもの眠そうな笑みを見せた。

「瞬矢となら、まあいいけど」

「結衣は少しだけ、瞬矢を誤解してる」

葵の言葉で、意識が引き戻される。

「いや、私たちを誤解してる。結衣はいつも皆の中心にいるから、私たちの思考を正しく読めない」

葵の足が、ゆっくりと俺に向かう。

「味方にするなら、家族にするべきなんだ。クラスメイトなんて味方につけても何の意味もない」

葵の顔が、近づいてくる。

いつもの眠そうな表情に、昏い目を浮かべた葵が。

「きつと私の方が、ずうっと瞬矢のことを理解してる。そう思わない？」

09話 落葉

「きつと私の方が、ずうつと瞬矢のことを理解してる。そう思わない？」

背後の校舎から聞こえる騒音が、遠く感じられた。

渡り廊下には、俺と葵しかない。

葵の昏い目が、すぐそこにあつた。

「葵……」

戻りたい、と思つた。

葵が語つたあの頃の俺たちの関係に。拗れる前の関係に。

葵に振り向いて貰いたいとずっと願つていた。眠そうな目で静かに本を読む葵の姿を、ずっと目で追つていた。

けれど、こんな結末は望んじやいない。

結衣を蔑ろにしてまで葵と一緒にになりたいと願つたことは一度もない。

何もかもがぐちゃぐちゃになつた今でも、それだけは確かだった。

「……違う。葵は何もわかつていない」

葵の瞳が、小さく揺れた。

「俺はこんなこと、望んでいなかった」
だから。

「もう、諦めてくれ」

これ以上の言葉は必要なかった。

これで分らないなら、どうせ堂々巡りにしかならない。

俺は踵を返して、渡り廊下を戻り始めた。

「瞬矢……？」

縫るような葵の聲が、背中から届いた。

意識的に、その声を無視する。

俺の足音が、渡り廊下に響き渡った。

教室が近づき、喧騒が戻ってくる。

同学年の廊下では、女子から好奇の視線が向けられた。

解決すべき課題が山積みだった。

教室に入ると、どこか心配そうな視線を向けてくる拓海と目があった。

ひとまずは、友人の誤解を解かないといけない。

昼休みに入ると、俺はすぐに拓海に声をかけた。

「飯、いいか」

「ああ」

拓海が弁当箱を取り出して立ち上がる。

すると隣の女子がからかうように笑った。

「うわあ、浮気だあ。結衣にチクつところ」

「勘弁してくれ」

自然とうんざりした声が出た。

そのまま拓海と揃って教室を出て、前と同じ中庭に向かう。

案の定、中庭のベンチには誰もいなかった。

雨は止んでいたが、ベンチには雫が浮いている。

「それで」

拓海は気にした風もなく、濡れたベンチに腰を下ろして俺を見上げた。

「一体どうなってるんだ？」

俺は小さく息をついて、拓海の隣に腰掛けた。

「葵に振られた後、事情を話した結衣に告白された」

「なんだ。そんなことだったのか」

肩透かしを食らったように拓海が笑う。

俺は首を横に振って、言葉が続けた。

「……まだ続きがあるんだ」

「続き？」

「昨日の昼休み。拓海と話してる間に葵が来ただろう」

「ああ」

「考え直した結果、やはり付き合いたいと言われた」

拓海の様子が固まる。

「おい……まさか二股かけたのか？」

「違う。結衣と付き合うことになったと正直に話した。葵は三人で話し合いたいと言っ

て、中庭に結衣を呼んだ」

「……おいおい」

拓海の様子が、徐々に引きつっていく。

「後は想像通りだ。俺たちの関係は完全に拗れて、結衣は葵に張り合うような振る舞いを見せている」

「おい、そりゃあ……」

拓海は何か言おうと口を開いて、結局何も思いつかなかったのかすぐに口を閉ざした。

雨上がりの後の冷たい風が吹き付ける。

俺は足元に視線を落として、後の言葉を探した。

「……俺は一体どうすればいい？」

拓海はすぐには答えなかった。

小さく息をついた後、髪を掻きあげるように空を仰いで、それから真っ直ぐと俺を見た。

「お前は どうしたいんだ？」

「俺は……元の関係に戻りたい。俺たち三人は幼い頃からずっと一緒だった。三人の関係を壊してまで前に進みたいとは思わない」

「違う。お前はどっちが好きなんだ？」

真っ先に葵の顔が浮かんだ。

教室で静かに本を読む葵の横顔を、俺はずっと目で追ってきた。

心地良い沈黙が落ちる二人きりの帰り道が好きだった。

つかず離れず。

唯一無二の関係が、俺にとっては何よりも尊いものだった。

社交的な結衣とは違って、葵はどこか俺と似ているところがあった。

「なあ……瞬矢はなんで短距離を辞めたんだ？」

拓海が突然、話題を変えた。

とくん、と心臓が跳ねた。

「これは俺の予想だけど、別に陸上が嫌いになったわけじゃないんだろ」

それはどこか確信めいた言い方だった。

「お前、あのまま行けばインハイだっていけただろう。なのに、すぱっと辞めちゃって

「キ」

中学の時の顧問にも、似たようなことを言われたことを思い出す。

「……それくらい好きだったんだろ。他の全てがどうでもよくなるくらい」

俺は何も答えられなかった。

言葉が、出てこない。

「このまま義理で葛城と付き合って、一体どうするんだ」

拓海の真剣な目が、俺を射抜いていた。

「二年が経って、二年が経って、それから先はどうするんだ」

静かな力のない声だった。

しかし、俺は何も答えられなかった。

「そのまま葛城と結婚するのか？ 義理だけでそこまでお前は出来るのか？」

拓海は、要領のいいやつだった。

物事の要点を、すぐに理解してしまう。なんでも器用にこなしてしまう。

拓海のこととは、いつだって正しい。

中学の時から、ずっとそうだった。

「そもそも、それは葛城にとつてどうなんだ。今は長宮に張り合ってるから何も気づいてない。でも葛城だって馬鹿じゃない。いつかお前の気持ちに気づく」

現状は、もつと最悪だった。

俺が葵に好意を寄せていることを、結衣は知っている。葵がそういう楔を打ってしまった。

「なあ、瞬矢。お前は正直でいい奴だ。誰にでも公平で、自分にも厳しい。そういうところが後輩たちに慕われていた」

けれど、と拓海は言った。

「公平なことが、いつだって正しいわけじゃない。特に恋愛はそうだ。答えなんてどこにもない」

拓海はそこで一度言葉を切った。

冷たい風が、体温を奪っていく。

思考も感情も、全て流されていく。

そして、拓海は告げた。

「瞬矢。お前がやってるのはただの一時しのぎだ。それは多分、残酷な結果しか生まない」

頭の中が真っ白だった。

反論すべき言葉が、思いつかない。

黙つてままの俺を見て、拓海が再び口を開く。

「よくいるよな。数年連れ添ったカップルが、最後にこう言うんだ。もう好きかどうかわからないって」

想像してしまった。

別れを告げる俺の姿を。すすり泣く結衣の姿を。

「義理と情で数年を無駄にした挙げ句、最後は面倒を見きれなくなつて突き放す。よくあるパターンだ」

完膚なきまでに、拓海は正論を吐き続ける。

「必ずどこかで限界がくるんだ。二人で将来の話をする度に、温度差ができる。情だけで付き合つてることを嫌でも自覚せざるを得なくて、罪悪感と自己嫌悪に苛まれる」

口の中が渴き切つていて、唇が切れたせいか血の味がした。

「最後の決め台詞はこうだ。きつと俺よりもっといい男がいる」

拓海の目には、哀れみのようなものが宿っていた。

淡々と現実を突きつける声は、どこか弱々しくも優しさがあつた。

「そうなたらもう、関係なんて修復不可能だ」

「……ああ」

「ずっと一緒だったんだろ。今ならまだ、戻れるんじゃないか」

まだ、戻れるのだろうか。

わからない。

正解なんて、きつとどこにもない。

風が吹き、木々が静かに揺れる。

はらはらと葉が落ちていくのが見えた。

落ちた葉は、風に流されるようにどこかへ消えていく。

その行方は多分、誰にもわからない。

10話 エラー

終業のチャイムが鳴る。

教室が喧騒に包まれる中、背後から拓海の声がかかった。

「寄り道していくか？」

振り返ると、いつも通りの拓海がいた。しかし、その瞳には気遣いの色があった。

「……いや。いつも通り、結衣と帰ることにする」

「……そうか」

拓海はそれだけ言うと、あっさり背中を向けた。

後ろ姿を見送っていると、入れ替わるように結衣が戸口に顔を見せた。

軽く手を上げると、結衣はどこか疲れた笑みを見せた。

鞆を肩にかけて、結衣の元へ向かう。

「……帰ろうか」

「うん」

葵については触れないことにした。

結衣も何も言わなかった。

並んで階段を下りていき、下駄箱で靴に履き替える。

「雨、止んだね」

空を見上げて、結衣が呟いた。

役目を失った傘が、ぶらぶらと彼女の右腕に引つかかって揺れていた。

「ああ」

相槌を打ちながら、濡れたアスファルトへ足を踏み出す。

雲間から差す淡い光が、周囲の水溜りに反射して煌めいた。

「ねえ」

敷地外に出たところで、結衣がどこか遠くを見つめながら言った。

「その公園。昔、よく遊んだよね」

少し道を外れると、小さい公園がある。

三人で遊んだ思い出の場所だった。

「……寄っていくか？」

「うん」

結衣の細い指が、俺の手に絡みついた。

雨上がりの澄んだ空気の中、結衣の目がじっと俺を見上げる。

「瞬矢は、随分と背が伸びたよね」

「……そうかもしれないな」

小学生の時は、葵が一番背が高かった。

女子の成長は、男子よりもずっと早い。

「私の中の瞬矢はね、私よりも小さくて、大人しくて。弟みたいだって思ってたの」

それは初耳だった。

小学校の中学年くらいで背は追い越したはずだったが、彼女の中のイメージはそこで止まっているのかもしれない。

「いつの間にか、大きくなっちゃったね」

眩くような彼女の言葉は、宙に溶けていく。

公園が見えてきた。

人影はなく、静かだった。

「……小さいな」

自然と思ったことがそのまま口を飛び出した。

昔は大きく感じた滑り台が、ひどく小さく見えた。

あれほど広かった砂場が、今はとても狭く見えた。

「うん」

結衣が引つ張るように、公園の中へ足を踏み込む。

濡れた土の上に、俺達の足跡が刻まれていく。

そのまま奥のベンチに向かうと、俺たちはどちらからともなく腰を下ろした。冬の訪れを予感させるように、周囲には命の気配がなかった。

鳥類の影も、虫の鳴き声もない。

ただ、雨で濡れた土がべつとりと広がっている。

「ここでき、よく鬼ごっこやったよね」

繋いだ手が、少しだけ強く握られた。

「ああ」

「私、鬼の時はいつも瞬矢ばかり狙ってたんだよ。知ってた？」

結衣はそう言って悪戯っぽく笑った。

いつものような元気はなく、どこか影のある笑い方だった。

「……それは初耳だな」

「その頃から、ずっと好きだったから」

言葉を探すように俺は視線を彷徨わせた。

子供が、公園の入り口に立っていた。二人の幼い男の子と女の子だった。

遠い昔の俺たちと重なって、それ以上言葉が出なかった。

黙り込んだ俺に対して、結衣もそのまま押し黙った。

繋いだ手に、沈黙が落ちる。

水たまりが煌めく中、子供たちがはしやぎながら滑り台に向かっていく。

自然と、目が釘付けになった。

よたよたと滑り台を登っていく姿は、在りし日の俺たちそのままだった。

滑り台がずっと大きく感じられて、この公園をもっと広大に感じていたはずの俺たちが、そこにいた。

「俺は」

無意識に言葉が飛び出した。

考えてのことではない。ただ胸の内が弾けて、勝手に吐き出してしまった。

「後悔してる」

結衣の視線が、何かを見定めるように俺を見上げる。

繋いだ手が、強く握られた。

「こんなこと、望んじやいなかった」

葵にも告げた言葉が、自然と繰り返された。

視線の先では、滑り台から幼い少女が滑り落ちるところだった。

着地点の泥が飛び散って、少女の綺麗な服を汚していく。それでも少年と少女は気にする風もなく、無邪気に笑い合っていた。

滑り台で遊ばなくなったのは、一体いつからだろう。

服が汚れるのを気にするようになったのは、一体何歳からだっただろうか。

この公園で遊ぶことをやめてしまったのは、一体何がきっかけだったのだろうか。

葵に恋心を覚えたのは、互いに性別の壁を意識し始めたのは、いつだっただろう。変わる事なんて何も望んでいなかったのに、何もかもが移ろいでいく。

「結衣」

繋いでいた手を、ゆっくりと離す。

結衣の瞳が、小さく揺れた。

「昔みたいな関係に、戻らないか」

力を失った俺の手を、結衣の小さな手が弱々しく掴んでいた。

子供たちのはしやぎ声が、閑静な住宅街に響き渡る。

「それは」

結衣の唇が微かに開いて、か弱い声を絞り出した。

「葵に何か言われたの？」

「ちがう」

即答する。

「全部、後悔してる。葵に告白したことも、結衣の告白を受け入れたことも」

何もかもが軽はずみだった。

俺の責任だった。

「今のまま進んでも、誰も幸せにはならない」

結衣は無言で足元の泥濘んだ地面を見ていた。

納得は出来なくても、きつと心の中では結衣もわかっているはずだ。

「一度だけでいい。三人で話し合う場を設けたい」

立ち上がる。

地面を眺めていた結衣の視線が、ゆっくりと俺に向けられた。

「話し合いの場は、俺が準備する。また連絡するから来て欲しい」

「瞬矢……」

縫うような結衣の目が、胸を締め付けた。

結衣が望んでいる言葉を、俺は吐けない。

そのまま踵を返し、俺は一人で歩き始めた。



「遅かったね」

自宅のリビングに入ると、当然のように葵がいた。

佳矢と並ぶようにソファに座り、映画を見ているようだった。

「うっわー、新婚さんみたいな会話」

佳矢が茶化すように笑う。

俺はそれを無視して、葵に目を向けた。

「葵。少しいいか」

「なに？」

葵が薄い笑みを浮かべて立ち上がる。

「部屋に来て欲しい」

「いいけど」

そう言いながら葵は佳矢を見やった。

佳矢は露骨に目を逸らし、気にしていない風を装っていた。

「ごゆっくりー」

ニヤニヤした佳矢をリビングに置き去りにして、葵とともに自室へ向かう。

部屋に入るなり俺は扉を閉め、正面から葵と向かい合った。

「率直に聞きたい。葵は、結衣のことをどう思っている？」

葵は一瞬だけ意外そうな顔を見せ、それから訝しそうに目を細めた。

「どうって?」

「言葉の通りだ。結衣と仲直りするつもりがあるのかを聞きたい」

「ああ……」

葵の目が、いつもの眠たそうなものに戻る。

「そんなの結衣次第じゃないかな」

短い返答だった。

真意が見えない。

「……葵は、最終的な落とし所をどうするつもりだ」

「落とし所?」

「最終的な物事の着地点を、葵はどこにしたいんだ」

「……結衣が身を引けば解決じゃない?」

「その後、結衣と葵の関係はどうなる?」

「どうって……」

葵は視線を逸らして、ベッドに腰を下ろした。

「……もう今更どうでもいいよ」

どこか自暴自棄な印象を受ける声色だった。

葵はそのままベッドに後ろ向けに倒れ、呟くように言った。

「ねえ、結衣の話なんてやめようよ」

制服のスカートが僅かに捲れ上がり、健康的な太腿が露わになる。

葵のいつもの眠たそうな目が、どこか妖艶な雰囲気纏うのがわかった。

「せっかく二人きりなんだから」

声色が変わり、葵は囁くように言った。

「いま、スカートに目がいったのわかったよ」

クスクスと笑いながら葵は足を組むように動かした。

「瞬矢は、私のこと好きだもんね」

「……葵」

俺の制止の声を振り払うように、葵が挑発的な目で俺を見た。

「そして、私も瞬矢のことが好き」

酷薄とも言える満足そうな笑みを葵は浮かべていた。

「なのに、瞬矢が何を躊躇しているのか私には分からないよ」

「……俺はただ、戻りたいだけだ」

葵はベッドに横たわったまま何も言わなかった。

「一度だけで良い。三人で話し合う場を設けたい」

まだ一度たりとも、三人で冷静に話し合う事が出来ていない。

「無駄じゃない?」

葵はどこか他人事のように言う。

俺は肺腑の中に息を吸い込んで、それから告げた。

「もし、俺が結衣と別れたらどうする?」

劇的な反応があつた。

葵は起き上がって、何かを探るように俺の目をじつと眺めていた。

「ゆっくりで良い。結衣との関係を修復できるか?」

「それは——」

葵が口を開きかけた時、インターフォンの音が響いた。

静かな家の中で、それは妙に大きく聞こえた。

葵は言いかけていた言葉を飲み込んで、息を潜めるように扉の向こうに視線を向けた。

「……見てくる」

言葉を残し、自室から外に出る。

途中で佳矢の声が聞こえた。

「お兄ちゃん、結衣さん来てるよー」

とくん、と心臓が跳ねた。

嫌な予感がした。

廊下が軋み声をあげる。

玄関に、結衣が立っていた。

「瞬矢……」

結衣は俺の姿を認めると、弱々しい笑みを浮かべた。

「さっきの公園のこと、私、色々考えて——」

結衣の言葉が、突然途切れた。

表情と呼べるものが消え去り、徐々に歪んでいく。

彼女の目は、俺の肩越しに何かを見ていた。

振り返ると、葵がいた。

「どうして」

結衣の震える声が、小さく響いた。

「どうして、葵がいるの?」

「結衣、これは——」

俺は適切な言葉を探そうとして、失敗した。

それは多分、致命的なエラーだった。

言葉を失った俺と葵を交互に見て、結衣は憎悪の籠もった声で呟いた。

「やっぱり……葵が裏で動いてたんだ」

11話 破綻

「やつぱり……葵が裏で動いてたんだ」

結衣の視線が、どんどんと剣呑なものになっていく。

この状況を正しく伝える術を、俺は持っていないかった。

もはや、何を言っても無駄なのは火を見るより明らかだった。

けれど、言わなければならない。

全てを説明して結衣を納得させる義務が、俺にはあった。

「結衣、これは——」

「瞬矢は黙っててッ！」

結衣が金切り声をあげる。

彼女の鋭い視線は俺ではなく葵に向けられていた。

「どうして葵がここににいるわけ？」

玄関の横に立った佳矢が、困惑した目で俺たちを見ていた。

結衣は佳矢を無視するように一歩前に出て、肩で息をするように大きく呼吸を繰り返していた。

「瞬矢がいきなり別れ話をしてくるなんておかしいと思った……全部、裏で葵が糸を引いていたんでしょ」

「結衣、違う。違うんだ。全て俺が言い出したことだ」

俺の言葉に、結衣が首を横に振る。

「瞬矢がそういう答えを出すように、葵が誘導したんでしょ。必要以上に私たちの関係を掻き回して、瞬矢が取れる選択肢を狭めていったんだッ！」

「結衣！ 落ち着いてくれ。葵は誘導なんてしてない。俺はただ、昔みたいに——」

「瞬矢ッ！ 騙されないで。これじゃあ全部葵の思う壺だよッ！」

結衣の叫び声と対象的に、葵がどこか冷めた声で言う。

「馬鹿じゃないの？」

「ッ！」

結衣は唇を強く噛みしめると、怒りに身を任せるように足を踏み出した。

廊下が軋み、あつという間に結衣と葵の距離がゼロになる。

直後、結衣の手が葵の襟元を掴んだ。

「せっかく瞬矢と付き合えたのに、邪魔ばかりしてッ！」

「邪魔してるのはそっちでしょ。私と瞬矢は両思いなんだから」

葵は馬鹿にした態度を崩すことなく、結衣を見下ろすように唇の端を歪めた。

「このッー！」

葵の襟元を掴んだまま、結衣が押し出すように動く。

葵の背中が狭い廊下の壁に当たり、鈍い音が木霊した。

「結衣、やめろ」

引き離そうと結衣の手首を掴む。

しかし、想像以上の力で葵の襟元を掴む結衣の手を離す事が出来なかった。

「絶対に許さない」

これまでの叫び声と異なり、全ての感情を削ぎ落としたかのような抑揚のない声が結衣の口から発せられた。

葵が結衣の襟元を掴み返し、今度は結衣を押し返すように壁に叩きつける。低い音が家中に響き渡った。

「あ、あの、結衣さんも葵さんもやめてくださいー！」

玄関横で突っ立っていた佳矢が困惑した声をあげる。

しかし、葵と結衣は聞く耳を見せず、互いの襟元を掴み合ったまま睨み合っていた。

「二人とも落ち着け」

二人の手首を握り、間に身体を捻じ込む。

「やめるんだ」

先に葵の手が、結衣の襟元から離れた。

それに呼応するように、結衣もまた掴んでいた手を離して見上げるように葵を睨みつけた。

沈黙が場を支配し、息を整えるように深い呼吸音だけが静かに繰り返された。

「頼むから、やめてくれ」

強い疲労感があった。

葵も結衣も、深い呼吸を繰り返しながら互いの様子をうかがうように黙ったままだった。

床の軋む音。

見ると、佳矢がすぐ横にいた。

「ね、ねえ。どういうこと？ お兄ちゃんと付き合ってるのは葵さんなんだよね？」

佳矢の目には、強い困惑の色があった。

この騒動の原因を、佳矢は知らない。

妹の目には、突然押しかけてきた結衣が暴れ始めたようにしか映っていないのだらう。

「瞬矢と葵が……付き合ってる？」

呆然としたように、結衣の眩く声が零れた。

妹の視線が、葵に向けられる。

「これ、どういうことなんですか？」

葵はいつもの眠そうな視線をぼんやりと俺に向けて、それから迷ったように視線を外した。

「詳しいことはよくわからないですけど……何となくは分かります」

佳矢が口を開く。

どこか怒りの色を含んだ声色だった。

「お兄ちゃんとか恋愛愛的な纏れがあったんですよね」

でも、と佳矢は言葉が続けた。

「お兄ちゃんは無口で不器用だし、二股とかは絶対にやらないと思います。トラブルの原因はお兄ちゃんじゃないはずですよ」

妹の目には、剣呑な何かが宿っていた。

「……葵さん、なにかしました？」

「私は、別に……」

「それ、本当ですか？」

「だって……私と瞬矢は両想いで……」

「だったら、なんなんですか」

ずい、と佳矢が一步前に出る。

「お兄ちゃん困ってるじゃないですか。葵さんがお兄ちゃんを困らせてるんです」
そこで佳矢は大きく息を吸うと、威嚇するように唸った。

「今すぐ出ていってください」

葵の目に困惑の色が宿った。

「これ以上、お兄ちゃんを困らせないでください」

どこまでも冷たい声だった。

葵の瞳が、迷うように左右に動く。

「お母さんにも言いますよ」

佳矢が言葉が続けると、葵は諦めたように目を閉じた。

「騒ぎを起こして悪かったね」

そう言い残して、玄関へ歩いていく。

葵は最後に一度振り返ると、薄い笑みを浮かべた。

「瞬矢。また学校で会おう」

「……ああ」

喉から絞るように声を出すと、葵は満足そうに一度頷いて玄関から出ていった。

ドアが閉まると、重い沈黙が落ちた。

俺は背後の佳矢に向き直ると、言うべき言葉を探した。

「……迷惑かけて悪い」

佳矢は困ったように笑って、それで、と探るように俺を見た。

「一体何があつたの？」

「話すと長いんだが……」

ぐちゃぐちゃになった頭の中を整理しながら、ゆつくりと順番に説明していく。

葵に振られたこと。結衣に告白されたこと。それを受諾したこと。

そして、葵から改めて好意を伝えられたこと。

話をしていくうちに、佳矢の表情が厳しいものになっていった。

「……葵さんも結衣さんも自分勝手すぎない？」

「いや。元々は俺がもつとはつきり言うべきだったことだ」

「でも、お兄ちゃんは板挟みになって困ってるよね」

妹はそう言いながら、それで、と息を漏らした。

「お兄ちゃんはどうがちが好きなの？」

「俺は……」

一瞬だけ、迷いがあつた。

ここまで拗れてしまえば、もう俺の想いなど関係ない事のようにすら思えた。

「……ずっと、葵のことが好きだった」

「そっか」

佳矢は短く頷いて、でも、と冷たい声を出した。

「今のままじゃダメだよ。お兄ちゃんは今元通り、三人仲良くいたいんでしょ」

「ああ」

「そもそも、それって無理だよ。異性が三人集まったら、絶対に一人が余るもん。これまでのような関係には絶対戻れないんじゃないかな」

「……ああ」

「そうなのかもしれない。」

「ずっと三人でいたいという考え自体が間違いなものかもしれない。」

「季節が巡り、何もかもが移ろいでいく。」

「俺たちは、いつまでも子供ではいられない。」

「周りとはどんどん交際して、結婚して、子供を産んでいくのだろう。」

「その中で、俺たちだけがずっと変わらない関係を維持するのは並大抵の事ではないけれど、そうあればいい、と思ってしまうた。」

「その結果が、これだ。」

「歪な願いには、歪な結果しか返って来ない。」

当然の帰結だった。

「……結衣を、傷つけてしまった」

「謝ればいいよ。それしかないもん」

佳矢が言う。

「大丈夫だよ。謝って許してくれなかったら葵さんとくつつけばいいんだよ。それで全部解決だね」

佳矢の乱暴な言い方に、思わず小さい笑いが零れた。

「そうだな。明日、謝ってくる。葵にも話をつける」

俺たちの関係は、完全に破綻した。

だから、もう終わらせよう。

これ以上、破綻しようがないのだから恐れる事は何もない。

明日、全てを終わらせる。

最終話 再生

翌日の空は、嫌になるほど晴れ渡っていた。

賑やかな校舎内を一人で進み、葵と結衣の教室へ向かう。

引き戸を空けると、クラス中の視線が一斉に集まった。

「あ、結衣はまだ来てないよー」

廊下側の席の女子がひらひらと手を振りながら言う。

俺は頷いて、教室中を見渡した。

ちようど奥から葵が歩いてくるところだった。

「葵」

呼びかけると、葵はいつもの眠そうな表情を浮かべながら俺の元まで来た。

「少し、いいか」

「うん」

やけに素直に頷く葵を連れて、廊下を引き返す。

いつかの渡り廊下までくると、人の気配がないことを確認して俺は葵と正面から向き

合った。

「話がある」

葵はじつと俺を見つめた後、小さく息をついた。

どこか諦めたような表情だった。

「結衣と仲直りして欲しいんでしょ。いいよ、別に」

葵の切れ長の目が、探るように俺を見る。

「今の関係を一旦整理したいなら、瞬矢がそれを望むなら、私はそうする」

想定外の切り返しに、俺は一瞬言葉を失った。

これまでと真逆の言動を見せる葵の真意が掴めなかった。

「……どういふことだ？」

自然と冷たい声が飛び出した。

探るように葵を見る。

葵は怯む事なく、俺の視線を正面から受け止めた。

まるで、何も疚しい事なんてないのだと主張するように。

「私は瞬矢のことが好きで、瞬矢も私のこと好き。けれど、そんなの何の意味もない」

葵の口から溜め息が漏れた。

「瞬矢の心の天秤は、常に良識と常識に傾いている。瞬矢自身の感情や損得は、いつも後回しになっている」

だから、と葵は言った。

「私は佳矢ちゃんやおばさんを巻き込んで、その天秤を壊そうとした。私に傾くように仕向けようとした」

けれど、と葵は自嘲するように笑った。

「私は失敗した。小細工がバレて、佳矢ちゃんにも嫌われてしまった。私が取れる選択肢は、もう殆どない」

葵の声には覇気がなかった。

ふと、脳裏に中学時代の拓海の姿がよぎった。大会で敗けた後、誰もいないロッカーでうなだれている後ろ姿。

今の葵は、あの時の拓海によく似ていた。

「これ以上は悪手にしかならない。私は一度、矛を収める事にするよ」

葵は淡々と言葉を繋げていく。

「なら……」

「ああ。瞬矢に従おう。必要なら、結衣に頭を下げてても良い。瞬矢が望む通りに動くよ」

あまりにも素直な言葉に俺が疑いの目を向けると、葵は肩を竦めてみせた。

「私の勝ち筋は完全に潰えた。仕切り直すしか方法がない」

そう言って、葵はいつもの眠たそうな表情で笑った。

良くも悪くも、葵は感情的にならない。

同級生にはないそうした部分だが、在りしの俺には孤高で気高く見えた。だから、その姿を自然と目が追うようになった。それは今も変わらない。

「瞬矢」

葵が短く問いかける。

「私のこと、嫌いになったかな？」

「……いや」

答えると、葵は満足そうに笑った。

「なら十分だ。私が優勢である事に変わりはない」

何か言おうと口を開きかけて、結局やめた。

もう話は終わった。

最後に呆れるように笑い返して、踵を返す。

「……結衣を呼んでくる」

教室に戻ろうとしたところで、後ろから声がかかった。

「今日は来ないんじゃないかな」

いつもの平坦な葵の声だった。

「結衣は、ああ見えて心が弱いから」

そうかもしれない、と思った。

結衣はいつも皆の中心に立っていたが、打たれ弱いところもあった。彼女は他人からの拒絶に、慣れていない。

「……一度、確認してくる」

葵は頷くと、俺の後ろを追いかけるように歩き始めた。

時計で時間を確認すると始業のチャイムが鳴る直前だった。

教室に戻り、引き戸を開ける。

結衣の席は空白になっていた。

「ほらね」

後ろから葵の声。

「どうする?」

「……放課後、結衣の家に向かう」

「私も行った方がいいかな?」

「いや、一人で行く。説得してから葵の家へ向かう事にするよ」

「そっか」

葵はそう言って、教室の中に戻っていった。

中に消えていく葵の背中が、少しだけ寂しそうに見えた。

終業のチャイムが鳴ると、拓海が声をかけてきた。

「收拾つきそうか？」

「半分は何か。残りの半分はこれから行ってくるよ」

答えると、拓海は嬉しそうに笑った。

「顔色、良くなったな。昨日のお前、今にも死にそうな顔してたぞ」

思わず苦笑する。

「少なくとも、今よりも状況が悪くなることはない」

「言ってる」

最後に小さく笑い合って、俺は教室から飛び出して昇降口に向かった。

生徒の間を抜けて、校舎を出る。

依然として、空は嫌になるほど晴れ渡っていた。

晴天の下、冬の乾いた風が頬を撫でていく。

いつもは三人で下校していた道が、今はとても広く感じられた。

小さい頃は、手を取り合って歩いていた。

今はもう、手を握り合う年齢ではなくなってしまった。

あるいは、もう一度手を握り合うような年齢になってしまった。

望む望まないに関わらず、何もかもが変わっていく。

変わらないことを願うには相応の努力が必要で、俺たちは多分、それをよくわかっていなかった。

今こそ、これまでのツケを払わなければならない時だった。

結衣の家に辿り着き、深呼吸する。

スマホを取り出し、コールボタンを押す。

数コール待っても、結衣は出なかった。

諦めてインターフォンに手を伸ばす。

『瞬矢くん？ ちょっと待ってね』

スピーカーから舞さんの声が届いた。

そのまま待っていると、すぐに玄関ドアが開いた。

扉の間から覗く舞さんは、いつもの笑顔ではなく暗い表情を浮かべていた。

俺は一步前に出ると、頭を下げた。

「突然の訪問、すみません。結衣に会わせて頂けませんか？」

「それはいいけれど、その、結衣と何かあったの？」

舞さんの声には、疲労の色があった。

「昨日帰ってきてから部屋に籠もりっぱなしで……」

「申し訳ありません。結衣を傷つけるような事をしてしまいました。謝罪と釈明の機会を頂きたいんです」

深く頭を下げる。

舞さんにはすぐには答えなかった。

沈黙が落ち、俺は頭を下げたまま動けなかった。

「あのね……」

舞さんの静かな声。

「瞬矢くん、そんなに畏まらなくていいから頭をあげて」

言われた通り、頭をあげる。

困った表情を浮かべた舞さんと目が合った。

「結衣と喧嘩したの？」

「……はい。それ以外にも、傷つけるような事をしました」

「そう……」

舞さんの視線が迷うように動く。

それから、小さな溜め息が漏れた。

「結衣とは、うまくいきそうにない？」

言葉に詰まった。

そんな俺を見て、舞さんは柔らかい笑みを浮かべた。

「あのね、瞬矢くんは小さい頃から結衣とよく遊んでくれて、たぶん、結衣にとつては唯一無二の存在だと想うの」

「……はっ」

俺にとつてもそうだった。

結衣と葵は、ただの友人ではない。

誰にも代替不可能な存在だった。

「そういう人と結ばれる事はとても素敵だけど、現実はとても難しく、そうなれない方が多いと思う」

だけど、と舞さんは続けた。

「だからと言って、そのまま縁を切るような事はしないで欲しいの。今はまだ互いに気まずいと思うけれど、それを我慢して友人として接して欲しいと私は思ってる」

舞さんの意図が正しく掴めなかった。

無言でいると、舞さんは小さく笑った。

「今はきつと強いショックを受けているけれど、三年後、五年後、十年後には笑い話になるから。この一瞬のために縁を切るような事だけはしないで約束してくれないかしら」

らう？」

「約束……ですか？」

思いがけない言葉に、俺は戸惑いを隠せなかった。

「そう。数十年来の友人というものは、とても得難いものだから。瞬矢くんたちにはまだわからないかもしれないけれど、色恋沙汰なんかで失っていいものではないから」

色恋沙汰なんか。

そう簡単に言つてのけてしまう舞さんは俺なんかより遥かに大人で、ずっと別の視点を持つているのだろう。

「……はい」

頷くと、舞さんは柔らかい笑みを浮かべて身体を引いた。

「どうぞ、入つて。ちよつとくらい怒鳴り合ひしても聞かなかつたことにするから」

小さく頭を下げて、玄關に入る。

「結衣は二階で鍵かけて閉じこもってるから」

「はい」

舞さんに見送られるようにして二階へ続く階段をのぼる。

二階にあがつてすぐ手前が結衣の部屋だ。

ドアの前に立ち、深く息を吸う。

それから軽くノックした。

「結衣、入っていいか」

反応はなく、ただ静寂があつた。

ドアノブに手をのばす。

鍵がかかつていた。

「結衣」

呼びかけるも、返事はない。

ふと、幼少期の思い出が脳裏に蘇つた。

小さい頃、結衣はよく不貞腐れて部屋に閉じこもっていた。

呼びかけても無視する結衣に為す術もなく、そのうち俺と葵は無理やりドアを開ける方法を覚える事になった。

財布を取り出し、一枚の硬化を鍵穴に差し込む。回すと、簡単にそれは開いた。

「結衣、入るぞ」

一声かけて、ドアを開ける。

ベッドの上で頭まで毛布を被っている結衣がそこにいた。

「結衣。話をしにきた」

ゆっくりとベッドに近づく。

足音に気づいたのか、毛布の中から結衣が顔を出した。いつものポニーテールではなく、下ろされていた。

「……何しにきたの？」

「誤解を解きにきた」

結衣の瞳は、俺に向けられたまま動かない。明確な拒絶の様子はなかった。

心の奥底では何らかの釈明を期待しているのだろう。

「座っていいか」

問いかけてから、返事を聞く前にベッドに腰掛ける。

結衣は逃げる様子もなく、毛布にくるまったまま俺を見上げていた。

「まず、はつきりとさせておきたい事がある。俺と葵は付き合っていない」

「……だって佳矢ちゃんが……」

「葵が吹き込んだだけだ。葵は母さんや佳矢に対して俺と付き合う事になったと吹聴していた」

「……なにそれ。最低じゃん」

結衣の声に活力が戻るのがわかった。

「そうだな」

俺は頷いて、小さく息をついた。

「すでに佳矢には経緯を説明した。母さんにも仕事から帰ってきたら話すつもりだ」
「じゃあ——」

弾む結衣の声を遮り、俺は言葉が続けた。

「結衣。俺は今のまま結衣と付き合い続けるつもりもない」

「……どういふこと？」

弾んでいった結衣の声が、突如低くなる。

俺は言葉を選びながら、ゆっくりと唇を開いた。

「俺は結衣や葵とずっと一緒にいたいと願っていた」

「……そんなの、無理だよ」

結衣の視線が、力なく下を向く。

「そうかもしれない。俺たちはどれだけ取り繕っても男と女で、これまでのようにはい
かないかもしれない」

「……ただ、だからこそ。」

「だから、時間をくれないか。俺は急ぎすぎた。無理に関係を変えようとして失敗した。
時間を巻き戻したい。そして猶予をくれないか」

結衣は何も言わず、俺の話を聞いてくれていた。

「全てをリセットさせて欲しい。一旦、関係を整理したい。それからゆっくりと、三人の

関係を探っていきたいんだ」

気づけば、結衣の目尻に涙が浮かんでいた。

「……もう、無理だよ。あんなに喧嘩して、葵と元通りに過ごすなんてもう無理だよ」

「結衣……葵とこのまま関係が拗れたままでもいいのか？」

「違うけど……だってもう無理だもん」

結衣はそう言って、毛布の中に潜り込んだ。

俺は毛布の上から結衣の頭を撫でてやることしかできなかつた。

「結衣……覚えてるか。俺たちは初めから仲が良いわけじゃなかつた」

自然と昔話が口から飛び出した。

記憶すら曖昧な、幼少期の日々。

「俺と葵は、内気な方だつた。騒がしい子供の世界で孤立しがちだつた」

もはや不確かだ、臍げな世界。

けれど、そこに俺たちを構成するに至つた原初の何かがあつた。

「そんな中、結衣はいつも皆の中心に立っていた。人気者だつた」

結衣は物怖じせず、誰とでも関係を持とうとした。

失敗することを恐れることがなかつた。

「結衣が、俺と葵を拾ってくれた。繋げてくれた。輪の中に入れてくれた」

はじめは、結衣が作っている集団の中の一人でしかなかった。

けれど、いつしか俺たちは三人で過ごさようになった。

「何も無いゼロから作り上げてくれた。結衣がいなければ、俺も葵も今とは全く違う人生を歩んでいたと思う」

だから。

「今度は、俺が結衣と葵を繋ぎたい。仲直りは難しいかも知れないけれど、それならもう一度ゼロからやり直したい」

それが心からの本心だった。

「俺はずっと、結衣と葵の三人でいたい。何度ゼロからやり直しても、この三人でいられたらいいと思ってる」

毛布の上から、そっと結衣の頭を撫で続ける。

ずっと昔、不貞腐れた結衣をこうして慰めた気がする。

「葵は結衣に頭を下げると言っていた。あとは結衣次第だ。その気があるのなら、俺が全部何とかしてみせるから」

沈黙があつた。

もともと毛布から結衣が顔を出す。

「……葵は、瞬矢のこと諦めたの？」

「葵は嘘がバレて佳矢に嫌われた。矛を収めるしかないと言っていたよ」
「自業自得じゃん」

結衣はそう言つて笑つた。

俺も小さく笑つて、そうだな、と返した。

「そつか。佳矢ちゃんに嫌われたのか」

結衣は小さく息をついて、それからゆつくりと起き上がった。

「……うん。それなら仲直りできる気がする」

冗談っぽく言う結衣に思わず苦笑を零す。

「なんだ、それは」

「だって、佳矢ちゃんが多分一番手強いんだもん。将来の小姑娘さんだよ」

小姑。

少しだけその兆候はあるかもしれないな、と考えて俺は小さく笑つた。

「結衣。葵と仲直りできるか？」

「……多分」

結衣は自信なさそうに小さく言う。

「大丈夫だ。今度は俺が、繋げてみせるから」

「うん」

さつきより強い言葉が返ってくる。

俺は頷いて、結衣の手をとった。

少しだけ、結衣の頬が赤くなる。

「さあ、葵に会いにいこう」

玄関を出ると、外は既に暗くなっていた。

「寒いね」

結衣が暗くなった空を見上げながら言う。

寒空の下、つないだ手が温もりを持っていた。

遠い昔のように、手をつないで葵の家を目指す。

結衣の家から葵の家に辿り着くまでの距離は、約100メートル。

中学のタイムは11.32秒だった。

この距離を葵と歩く為だけに、俺は陸上を辞めた。

中学の顧問にも、友人たちにも引き止められた。

父親にも、考え直せ、と言われた。

けれど、俺の価値観の中では陸上よりも遥かに高い位置に葵の存在があった。

いや、葵だけではない。

結衣も含めた俺たち三人の関係こそが、あらゆる優先順位の中で常に最上位にあったような気がする。

ずっと続けばいいと思った。

三人でいつまでも笑っていらればいいと思った。

けれど、そんな事はきつとただの絵空事でしかない。

俺たちは男と女で、奇数だった。

この関係は永遠に続くものではない。

だから、いつかは決めなければならぬ。

俺たちは意識して、一歩前に前進しなければならぬ。

けれど、それは少しだけ後の話だ。

今はただ、元通りに再生するだけでいい。

かけがえのない日常を取り戻し、それを噛みしめるだけでいい。

今はまだ、束の間の日常を楽しもう。

選択の日は、そう遠くないのだから。

遠くに影が見えた。

家の前で、葵が俺たちを待っていた。

俺は結衣と顔を見合わせて、アスファルトの上を駆け出した。

了

今だけは、
1 1 .
3 2 秒よりも少しだけ早く走れる気がした。